

石谷遺跡・石谷 1 号墳発掘調査報告

— 伊賀市中村 —

2024（令和6）年3月

三重県埋蔵文化財センター

例 言

1. 本書は、三重県伊賀市中村に所在する石谷遺跡・石谷1号墳の発掘調査にかかる報告書である。
2. 本遺跡の調査は石谷の1通常砂防事業に伴い、現地調査から報告書作成に至る経費は三重県県土整備部から執行委任を受けた。
3. 発掘調査期間は、令和3年5月27日から令和3年10月8日までである。
4. 発掘調査面積は394㎡である。
5. 発掘調査体制は、次のとおりである。

【発掘調査】

調査主体	三重県教育委員会
調査担当	三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課
主任	長谷川市太郎 技師 樋口太地
発掘調査作業委託	株式会社アート 三重支店
空中写真撮影業務委託	安西工業株式会社 三重支店

【整理作業】

整理担当	三重県埋蔵文化財センター 調査研究1課 長谷川・樋口
保存処理業務委託	株式会社 吉田生物研究所

6. 現地での図面作成及び写真撮影と当センターでの遺物写真撮影は調査担当者が行った。
7. 本書の執筆および編集は、樋口が行った。
8. 調査にあたって、下記の諸氏や機関に御指導・ご協力を賜った。記して感謝したい。(敬称略、順不同)
諫早直人、大谷宏治、甲斐由香里、笠井賢治、眞名井孝政、三重県警察伊賀警察署
9. 調査図面・写真・出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにて保管している。
なお、出土した銃弾は全て伊賀警察署が回収し、当センターでは保管していない。

凡 例

1. 本書では、国土地理院発行の1：25,000 数値地図（「上野」相当、）および遺跡地形図において、三重県市町総合事務組合管理者の承認を得た三重県共有デジタル図を用いている。（令和5年4月6日三総合地第1号）。遺跡調査区位置図に使用した事業計画図は三重県伊賀建設事務所の提供による。
2. 標高は、東京湾平均海水面を基準とした。
3. 本書で用いた座標は世界測地系に拠る。方位は第Ⅵ座標系の座標北で示した。
4. 本書で用いる遺構略号は以下のとおりである。
SD：溝・落込み
5. 土層及び土器の色調表記は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社、2005年版）に拠った。
6. 遺物実測図の縮尺は1：4を基本とし、遺物によってはその他の縮尺を適宜用いた。縮尺は各図版にキャプション及びスケールにて示している。
7. 註は原則として各章の文末に付し、参考文献も註に記した。
8. 遺構一覧表、遺物観察表は各章末に付した。
9. 遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
 - ・報告 No. は、遺物図版及び写真図版中で各遺物に付した番号と対応している。
 - ・実測番号は、当センター所蔵の遺物実測図番号である。
 - ・色調は標準土色帖の色名に拠る。
 - ・土器および陶磁器類の残存率は口縁部の全周を12分割して示す（例 3/12）。口縁部が遺存していないものについては、底部等の残存率を示した。また、1/12以下のものは「小片」等としている。
 - ・計測値は完存ないし復元の値である。口径・底径は実測時の接地面で計測した値とした。
 - ・土器の器種名称や編年観については、基本的には下記の文献に拠る。

西 弘海 1978「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
10. 写真図版中の遺物に付した番号は、各遺物の報告 No. と対応する。遺物写真は縮尺不同である。

目 次

I 前 言			
1 調査の経緯と経過	1	2 発掘調査の方法	2
II 位置と周辺の諸環境			
1 地理的環境	3	3 石谷古墳群の現状	4
2 歴史的環境	4		
III 遺 構			
1 調査の方法	6	3 横穴式石室の調査	10
2 墳丘の調査	7	4 石室構築過程と使用石材	14
IV 遺 物			
1 石谷1号墳出土遺物	15	2 石谷遺跡出土遺物	23
V 自然科学分析			
1 分析の概要	30	3 構造の検討	35
2 金属製品成分分析調査	30		
VI 総 括			
1 古墳の時期的位置づけ	36	3 副葬品の位置づけ	41
2 横穴式石室の位置づけ	37	4 石谷1号墳からみた地域社会	42

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第13図 出土遺物実測図(土器2)	21
第2図 遺跡地形図	5	第14図 出土遺物実測図(土器3)	22
第3図 墳丘地形図	7	第15図 出土遺物実測図(土器4)	23
第4図 遺構平面図	8	第16図 No.1-1 杏葉地金	31
第5図 墳丘土層図	9	第17図 No.1-2 杏葉箔	31
第6図 石室展開図	11	第18図 No.2-1 杏葉地金	31
第7図 遺物出土状況図	12	第19図 No.2-2 杏葉箔	31
第8図 石室構築過程および石材配置図	14	第20図 No.11-1 辻金具地金	31
第9図 出土遺物実測図(武器・工具)	16	第21図 No.11-2 辻金具箔	31
第10図 出土遺物実測図(馬具)	17	第22図 No.12-1 耳環地金	31
第11図 出土遺物実測図(装身具)	19	第23図 No.12-2 耳環箔	31
第12図 出土遺物実測図(土器1)	20	第24図 No.13-1 辻金具地金	31

第25図 No.13-2 辻金具箱	31	第39図 No.2-1 杏葉	34
第26図 No.1 杏葉表	32	第40図 No.2-2 杏葉	34
第27図 No.1 杏葉裏	32	第41図 No.11-1 辻金具	35
第28図 No.2 杏葉表	32	第42図 No.11-2 辻金具	35
第29図 No.2 杏葉裏	32	第43図 旧山田郡域の横穴式石室	37
第30図 No.11 辻金具表	33	第44図 周辺地域の横穴式石室	39
第31図 No.11 辻金具裏	33	第45図 県内の須恵器椀副葬古墳	
第32図 No.13 辻金具表	33	とその分布	42
第33図 No.13 辻金具裏	33		
第34図 No.12 耳環表	33	写真1 天井石撤去の作業風景	2
第35図 No.12 耳環裏	33	写真2 空中写真撮影の作業風景	2
第36図 再定点分析箇所	34	写真3 石谷22号墳の現状	5
第37図 No.1-1 杏葉	34	写真4 石谷4号墳の現状	5
第38図 No.1-2 杏葉	34	写真5 出土遺物集合写真	44

表目次

第1表 金属製品観察表	24	第7表 土器観察表④	29
第2表 土製品観察表①	24	第8表 分析資料一覧	30
第3表 土製品観察表②	25	第9表 EDX結果一覧	30
第4表 土器観察表①	26	第10表 再定点分析結果一覧	34
第5表 土器観察表②	27	第11表 伊賀・名張地域の石室一覧	38
第6表 土器観察表③	28	第12表 周辺地域の石室一覧	40

写真図版

写真図版1(調査前写真)	写真図版14(出土土器1)
写真図版2(全景写真)	写真図版15(出土土器2)
写真図版3(東区・墳丘)	写真図版16(出土土器3)
写真図版4(墳丘)	写真図版17(出土土器4)
写真図版5(天井石)	写真図版18(出土土器5)
写真図版6(羨道・玄室)	写真図版19(出土土器6)
写真図版7(玄門・玄室)	写真図版20(出土土器7)
写真図版8(石室全景)	写真図版21(出土土器8)
写真図版9(玄室)	写真図版22(出土金属製品1)
写真図版10(天井・奥壁)	写真図版23(出土金属製品2)
写真図版11(側壁)	写真図版24(出土金属製品3)
写真図版12(遺物出土状況1)	写真図版25(出土金属製品4)
写真図版13(遺物出土状況2)	

I 前 言

1 調査の経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

石谷遺跡・石谷古墳群は、山田盆地を西に臨む山塊の斜面上に形成された小溪谷沿いに位置する遺跡である（第1図）。この周辺では溪岸浸食が進んだ結果、河床には不安定土砂が堆積しており、土石流による下流人家および道路への被害が懸念されていた。これを受け、当遺跡を含む中村地区を対象とした県営砂防事業（通常砂防事業 石谷の1）が計画され、原因者である三重県伊賀建設事務所と保護措置について協議を行った。平成24年度に実施した範囲確認調査の結果、砂防堰堤の施工範囲内に石谷1号墳が存在し、工事の影響を受けることが判明した。

これを受け、平成25年度に石谷1号墳周辺の範囲確認調査を実施した。砂防堰堤建設予定地に5箇所調査坑を設定した結果（第2図）、明確な遺構は検出されなかったものの、包含層からは古墳時代の土師器や須恵器が出土した。石谷遺跡には石谷古墳群に関連する遺構面が存在する可能性が確認され、既知の石谷1号墳に加え、石谷遺跡についても調査範囲として把握した。

<文化財保護法等にかかる諸通知>

文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項

・平成30年10月23日付け 伊賀健第462号（県教育長あて県知事通知）「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等の発掘通知書」

文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査実施報告

・令和3年6月7日付け 教理第59号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

遺失物法にかかる文化財発見・認定報告

・令和4年10月15日付け 教理第182号（伊賀警察署長あて県教育長通知）

(2) 調査の経過

発掘調査は令和3（2021）年5月27日に開始し、同年10月8日に終了した。調査の経過に関しては以下の通りである。

2021（令和3）年

- 5月27日 古墳周辺の地形測量を実施
- 6月14日 調査区割を設定
- 6月17日 北区の表土掘削開始
- 6月18日 北区で周溝（SD1）を検出
- 6月21日 西区・東区で表土掘削開始
- 6月22日 南区で表土掘削開始、羨道掘方を検出
三八式実包出土（伊賀警察署が回収）
- 7月5日 羨道の掘削開始
- 7月9日 羨道の基底石を検出
- 7月13日 羨道埋土の土層断面図化完了
- 7月15日 羨道写真撮影完了、落石除去
西区サブトレンチ掘削、SD2検出
- 7月19日 羨道排水溝を検出
- 7月20日 玄室南半の石敷を検出
- 7月21日 古墳全景写真（第1回）撮影
- 7月26日 羨道記録作業完了
- 7月27日 玄室天井石検出
- 8月4日 玄室内の流土掘削開始
- 8月5日 玄室内グリッド設定、土層縦断面記録
- 8月11日 玄室立面図作成、玄室流土ふるいがけ
- 8月24日 クレーンによる石室の天井石撤去完了
- 8月25日 東区SD3検出
- 8月26日 玄室床面から刀・馬具・刀装具出土
- 8月30日 金属製品は出土状況記録後取り上げ
- 9月3日 ドローンによる空中写真撮影
- 9月6日 古墳全景写真（第2回）撮影
- 9月8日 東区（石谷遺跡）の表土掘削開始
- 9月10日 玄室内床面撤去、写真・図面完了
- 9月15日 墳丘断ち割り、土層記録完了
- 9月16日 現場引き渡し

(3) 普及公開

令和3年8月末に現地説明会を計画したが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い三重県も緊急事態宣言区域に追加されたため、中止となった。宣言解除後に発掘成果報告会を伊賀市との共催により計画したが、新型コロナウイルス感染状況の拡大にともない、再度中止を余儀なくされた。その代替として、Youtubeに「リモート発掘調査成果報告会」として解説動画を公開した。

2 発掘調査の方法

(1) 地区設定

調査区内の地区割は世界測地系を採用し、3m四方の地区設定を行った(第3図)。X = -137,778 m、Y = 212,252 mを原点に、調査区内の北西隅が起点となる地区名を与えた。この上で、露出した天井石から想定される古墳の主軸に沿って、東西南北の4つの調査区割を設定した。

(2) 遺構検出・掘削

表土から遺構面までの堆積土の除去及び遺構検出・掘削はすべて人力で行った。ただし、崩落した天井石の撤去はラフテレーンクレーンを用い、調査最終段階における墳丘の断ち切りは重機(バックホー)で行った。なお遺構掘削の詳細については第Ⅲ章の冒頭で補足する。



写真1 天井石撤去の作業風景

(3) 記録・図化

各遺構の詳細な平面図・断面図・立面図は基本的に1/20の手書き実測を行い、玄室内の遺物出土状況図に限っては1/10のスケールで記録した。

遺跡の調査写真については、調査全景や重要な個別遺構などはニコンD 800 Eで撮影した。通常の調査前状況や遺構、土層断面などはニコンD 3300 Eで撮影した。また、コンパクトデジタルカメラ(オリンパス TG835)での撮影も適宜行った。また、空中写真撮影では小型無人航空機(ドローン)にソニーα 7 R IIを搭載して撮影した。

なお、これらの図面・撮影画像データ・作業日誌の記録類は当センターで保管している。

(4) 出土遺物の管理

出土遺物は遺構のグリッド及び出土年月日単位で区分して取り上げている。また、報告書掲載遺物およびその参考資料(A遺物)と未掲載資料(B遺物)に分けて整理を行い、保存している。保存処理はA遺物の一部に限定している。金属製品はA遺物の全てが保存処理対象である。

なお、石室内床面直上で出土した遺物については40cmグリッドを設定した上で取り上げ(第7図)、玄室内の埋土についてもグリッドごとにもふるいがけを行い、細片化した遺物の回収に努めた。



写真2 空中写真撮影の作業風景

Ⅱ 位置と周辺の諸環境

1 地理的環境

名阪国道の中瀬インターから国道163号線を長野峠方面へ向かうと服部川の中流域にさしかかり、山田盆地が拓けてくる。山田盆地は、木津川支流の服部川の流域に拓けた山間の盆地で、伊賀盆地の東端を占める。この盆地の南縁には、真泥・中島・富岡・出後などの集落があり、盆地の中央に平田がある。平田は街道四宿の一つであり、同時に盆地の中心集

落でもある。この平田の東に隣接する形で中村の集落がある。

石谷遺跡・石谷古墳群(1)は、伊賀市中村地内にあり、西教山から南北に延びる山塊の西側斜面に形成された小谷沿いに展開し、25基の古墳が確認されている。この周辺の基盤層は堆積岩類から成り、「石谷」の地名からも分かるように、地表には露出した大型の自然石が確認できる。



- | | | | | | |
|---------------|-----------|------------|------------|-----------|--------------|
| 1. 石谷遺跡・石谷古墳群 | 6. 寺垣内古墳 | 11. 西谷古墳群 | 16. 富岡前山古墳 | 21. 平林古墳群 | 26. 喜春遺跡 |
| 2. 西谷遺跡 | 7. 寺音寺古墳 | 12. 田中古墳群 | 17. 向山古墳群 | 22. 西沖遺跡 | 27. 宮の森遺跡 |
| 3. 東垣内遺跡 | 8. 高猿古墳群 | 13. 横枕古墳群 | 18. 下中島古墳群 | 23. 歌野遺跡 | 28. 勘定塚古墳 |
| 4. 植田遺跡 | 9. 鳴塚古墳 | 14. 中出山古墳群 | 19. 神林古墳群 | 24. 鳳凰寺廢寺 | 29. 外山・鷺棚古墳群 |
| 5. 荒木車塚古墳 | 10. 野台古墳群 | 15. 辻堂古墳 | 20. 墓谷古墳群 | 25. 御墓山古墳 | 30. 天道遺跡 |

第1図 遺跡位置図(1:50,000)

2 歴史的環境

当遺跡をとりまく諸環境について、既存の調査や資料をもとに概観する（第1図）。

（1）縄文時代から弥生時代の山田盆地

山田盆地では縄文時代から人間活動が確認されており、西谷遺跡（2）では縄文土器が伴う集石遺構がみつまっている¹⁾。弥生時代に入ると遺跡数が増加し、東垣内遺跡（3）・植田遺跡（4）では弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土している。これらの遺跡では東海系の台付甕と畿内系の庄内・布留系甕の両方がみられ、両地域の中継地にあたる山田盆地の特質をよく表している。

（2）古墳時代の山田盆地

古墳時代前期（4世紀）に入ると前方後円墳の築造が開始し、盆地の東端では荒木車塚古墳（5）や寺垣内古墳（6）が築かれる。いずれも未調査であるが、全長は50mを超え、周辺では埴輪が表採されている。古墳時代中期（5世紀）には全長約50mの前方後円墳である寺音寺古墳（7）が築かれる。埋葬施設は盗掘を受けているが、金銅装金具や甲冑片の出土が伝えられており、山田盆地一帯を統轄した有力首長の存在が窺える。また、山田盆地に南から流れ込む中野川の右岸には5世紀中頃から高猿古墳群（8）が形成される。

古墳時代後期（6世紀）には全長37mを測る鳴塚古墳（9）を最後に前方後円墳の築造は終息し、替わって群集墳が展開する。6世紀前半の古墳としては前述の鳴塚古墳の他に、野台3号墳（10）や西谷1号墳（11）がみられる。6世紀後半から7世紀初頭には古墳の数は増加し、田中古墳（12）・横枕古墳群（13）・中出山古墳群（14）・辻堂古墳（15）・富岡前山古墳（16）・向山古墳群（17）・下中島古墳群（18）・神林古墳群（19）・墓谷古墳群（20）・平林古墳群（21）などが知られている。この中でも、銀象嵌円頭大刀と金銅装馬具が出土した富岡前山古墳や、山田盆地内で最大級の横穴式石室を持つ向山2号墳からは在地の有力層の存在が窺える。また、集落の調査事例は多くないものの、西沖遺跡（22）で6世紀後半から7世紀にかけての竪穴建物がまと

まって検出されている。

（3）古代の山田盆地

7～8世紀の集落遺跡としては西沖遺跡や歌野遺跡（23）が知られており、カマドを伴う竪穴建物がまとめて検出されている。また鳳凰寺廃寺（24）では白鳳期の瓦が出土しており、県内では類例のない瓦製作技法を採用し、中国地方や北陸地方との技術的共通性が指摘されている²⁾。

3 石谷古墳群の現状

発掘調査に際して、石谷古墳群の踏査を実施した。以下ではその概要を記す（第2図）。

石谷古墳群は地名の通り、小溪谷を流れる小川を挟んで形成された古墳群であり、北側に1～10・22号墳、南側に11～21・23～25号墳が位置する。今回の踏査で墳丘や石室を確認できたのはこの内1～6号墳、13～18号墳であり、一部外見では古墳か判断できないものもみられた。

確認できた古墳については、2号墳を除いては円丘状を呈しており、天井石や石室開口部が露出している場合が多く、6～7世紀に築造された横穴式石室を主体部とする古墳である可能性が高い。2号墳は現状では方丘状を呈し、石室等の痕跡はみられない。竪穴系の主体部を持つ古墳ないしは墳丘墓の可能性もある。全体としては、6～7世紀に盛行するいわゆる群集墳として復元できるが、詳細については未調査のため不明である。

註

1) 遺跡の出典は基本的に以下の文献に拠る

・大山田村 1982『大山田村の史』上巻

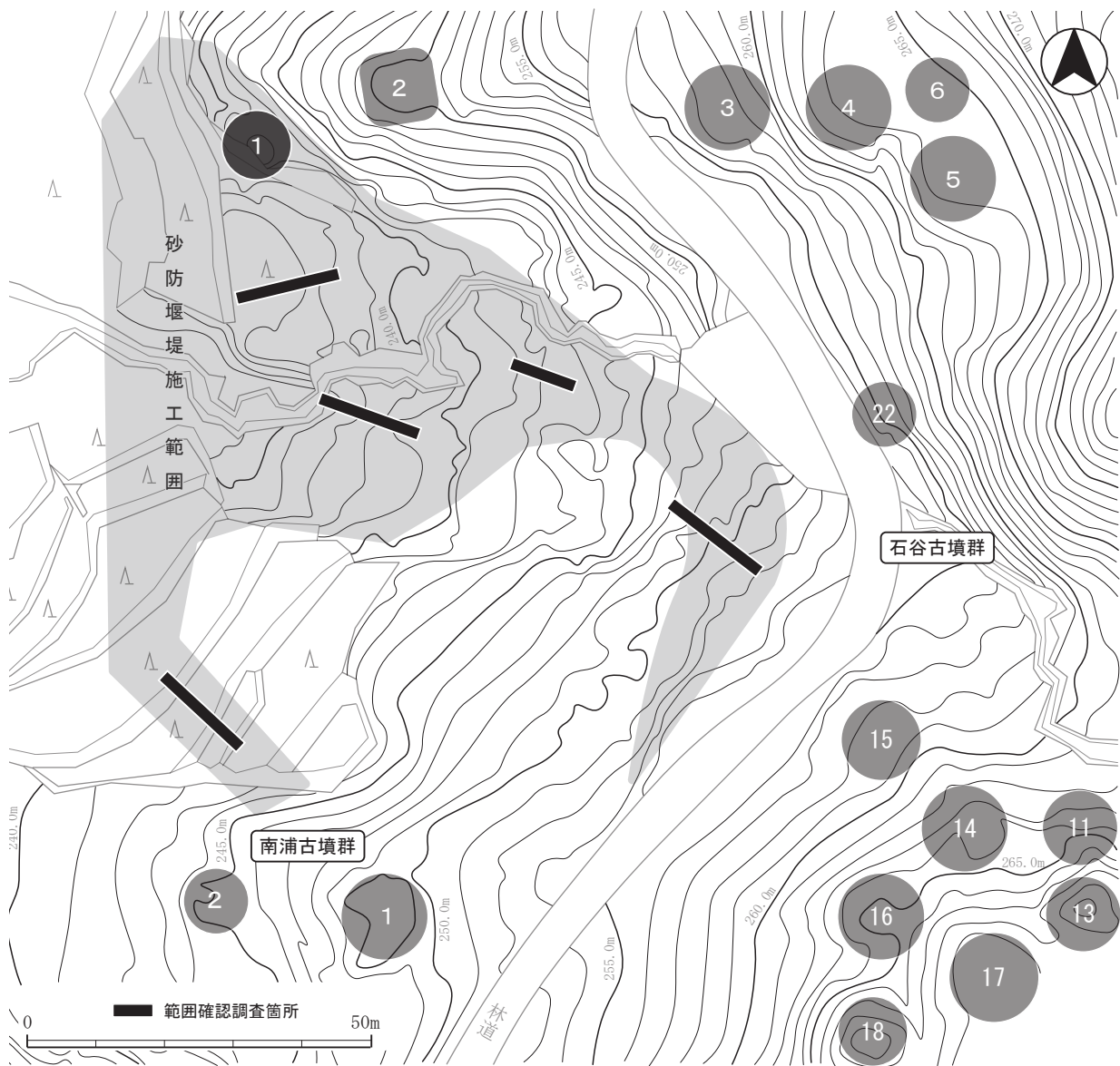
・三重県 2005『三重県史』資料編 考古1

・三重県 2008『三重県史』資料編 考古2

・三重県埋蔵文化財センター 2007『研究紀要 伊賀の考古資料』第16-3号

2) 山田 猛 2000「1 遺物」『鳳凰寺遺跡第二次発掘調査報告書』

大山田村教育委員会・大山田村遺跡調査会



第2図 遺跡地形図(1:1,000)



写真3 石谷22号墳の現状



写真4 石谷4号墳の現状

Ⅲ 遺 構

1 調査の方法

石谷1号墳では、平成24年度に範囲確認調査を実施し、墳丘や石室の遺存状況を確認した。その結果、天井石と思われる大型石材の下端が露出しているのが見受けられ、古墳であることが確定した。なお、周辺の古墳でも開口した横穴式石室が確認でき、当古墳も横穴式石室を採用していることを想定した。しかし、当該石材はやや傾いた状態で露出しており、石室が何らかの破壊を受けていることが予想できた。事業計画上、石谷1号墳の破壊は免れなかったため、令和3年度に全面的な発掘調査を行うこととなった。

調査前には墳丘及び周辺の地形測量を行い、半月状の高まりを確認できた(第3図)。古墳の南半分は林道が通っており、円墳が半分削平された結果このような形になったと予想した。また、古墳は尾根上に立地せず、尾根の南斜面を削り込んで成形していることが推定できた。

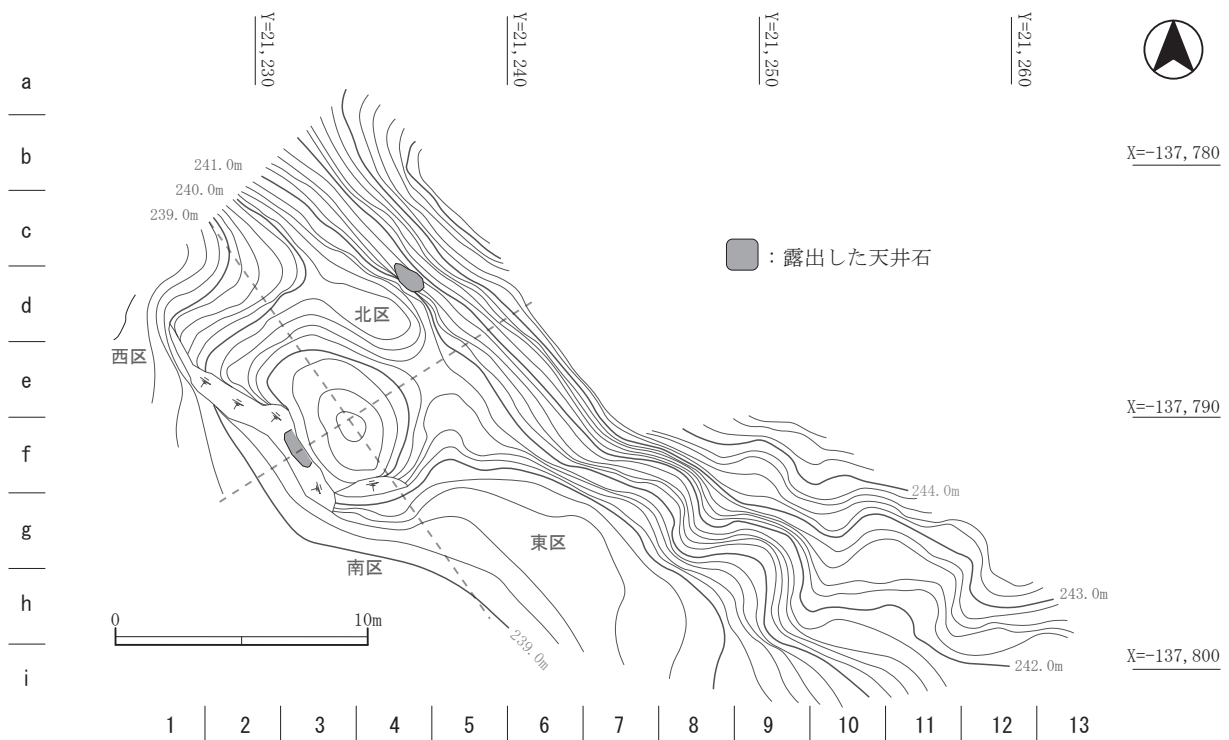
墳丘の調査 発掘調査終了後は砂防工事によって古墳が破壊されることが前提となったため、墳丘や石室の一部を解体することも視野に入れて調査を開始した。なお、掘削作業はすべて人力で行った。まず、表土掘削を行い盛土面と周溝の検出を試みた。南側は林道による削平と水田耕作による攪乱が広範にみられ、墳丘盛土の大半が流出し、周溝を確認することはできなかった。北側では表土を取り除いたところ、グライ化した馬蹄状の溝(SD1)を検出した。SD1を掘削したところ、墳丘北側の斜面が崩落する危険が発生したため、再度地形測量を行った上で斜面を養生し、それ以上の掘削は中止した。墳丘の西側と東側については、斜面が崩落する心配はなかったので、地山面までトレンチを入れて周溝の検出を試みた。西側では周溝と思われる溝状の落ち込み(SD2)が検出できたが、林道による削平を強く受けた東側では墳丘が大きく削られていることが判明し、地山の落ち込み(SD3)は確認できたものの、周溝は見受けられなかった。また、表土を取り除いた際に、天井石と思しき板状の大型石材が複数箇所からみつかった。これらの石材の下には流

土が入り込んでおり、石室が大規模な破壊を受けている可能性が高まった。

埋葬施設の調査 墳丘上の表土を取り除く過程で、当初から露出していた天井石の南側(林道削平箇所)で帯状に流土が堆積する落ち込みを検出した。土層記録用のアゼを残しながらこれを段階的に掘削したところ、崩落した天井石や石室の側壁が現れ、当古墳の埋葬施設が横穴式石室であることが確定した。検出された羨道は完全に埋没しており、崩落した天井石などを記録した後に取り除きつつ、人頭大の礫が面的に検出される層まで流土を掘削した。ここから崩落した礫などを除去した結果、羨道の中央に石で組まれた排水溝が確認できた。この排水溝は地山ではなく、貼床面に掘り込まれていることが観察できたが、玄室内の土層との整合を図るため、記録作業を行った上で羨道の調査をここで一旦停止し、玄室の調査に移った。

調査当初から露出していた天井石の周囲を掘削したところ、予想通り崩落しており、南側に大きく傾いていることが判明した。掘削が完了した羨道から玄室に進入するにはこの天井石の下に堆積した流土を取り除く必要があったが、天井や側壁の更なる崩落を招く可能性があった。これを踏まえ、墳丘盛土の調査も兼ねて、墳頂部から石室に向かって掘削を進めることとした。土層観察用のアゼを残しながら天井石が露出するまで盛土を除去したところ、原位置を保つ天井石は奥壁上の1枚のみであった。一方、崩落が危惧されていた天井石は側壁上に座っているものの、玄室内の調査を実施するには危険であると判断し、ラフタークレーンを用いて撤去した。その後、側壁の補強を行いつつ、土層の記録を随時取りながら玄室内の流土・埋土を除去し、敷石面を検出した。この段階で石室内の記録作業を実施した。なお、割り付け・図化などすべて手作業で行った。記録作業終了後は敷石を剥がし、下層の排水溝や床面の断ち割りをを行い、再度記録作業を実施した。

石室内部調査終了後は墓壙の調査を実施したが、調査期間や安全性の問題から石室の解体はせず、部分的な断ち割りを行うにとどまった。



第3図 墳丘地形図(調査前)(1:300)

石谷遺跡の調査 石谷1号墳の東側斜面には、調査前の現況で人工的な平坦面や谷状の落込みが確認でき、遺構の可能性を考慮して表土掘削を行った。その結果、表土から近世以降の遺物が出土したものの、明瞭な遺構は検出できなかった。

2 墳丘の調査

(1) 周溝と墳形

形態 墳丘の北側と西側では周溝と思われる溝を確認した。南側と東側では林道によって削平されていたが、東側では地山が落ち込む箇所が認められ、残存状況からは馬蹄形の周溝が復元できる(第4図)。北西側で検出した溝は緩く湾曲しており、墳形は円墳が想定され、地形測量結果とも整合する。西側周溝の東上端から石室中心軸までは約7mを測ることから、墳丘規模は14m前後となる。西側の周溝(SD2)は幅60cm・深さ30cm前後で、横断面形は緩いU字を呈する。

遺物 周溝内からは遺物はほとんど出土せず、須恵器甕の破片がみられるのみである(第14図192)。これらは完形に復元できず、出土位置もばらばらであるため、古墳が破壊される過程で、元々墳丘上や石室内にあった遺物が流れ込んだものとする。ま

た、墳丘やその東側の石谷遺跡として把握した表土からは近世から近代の陶磁器片や銃弾(第15図197~202)が出土しており、この時期に古墳の破壊が進んだことが窺える。

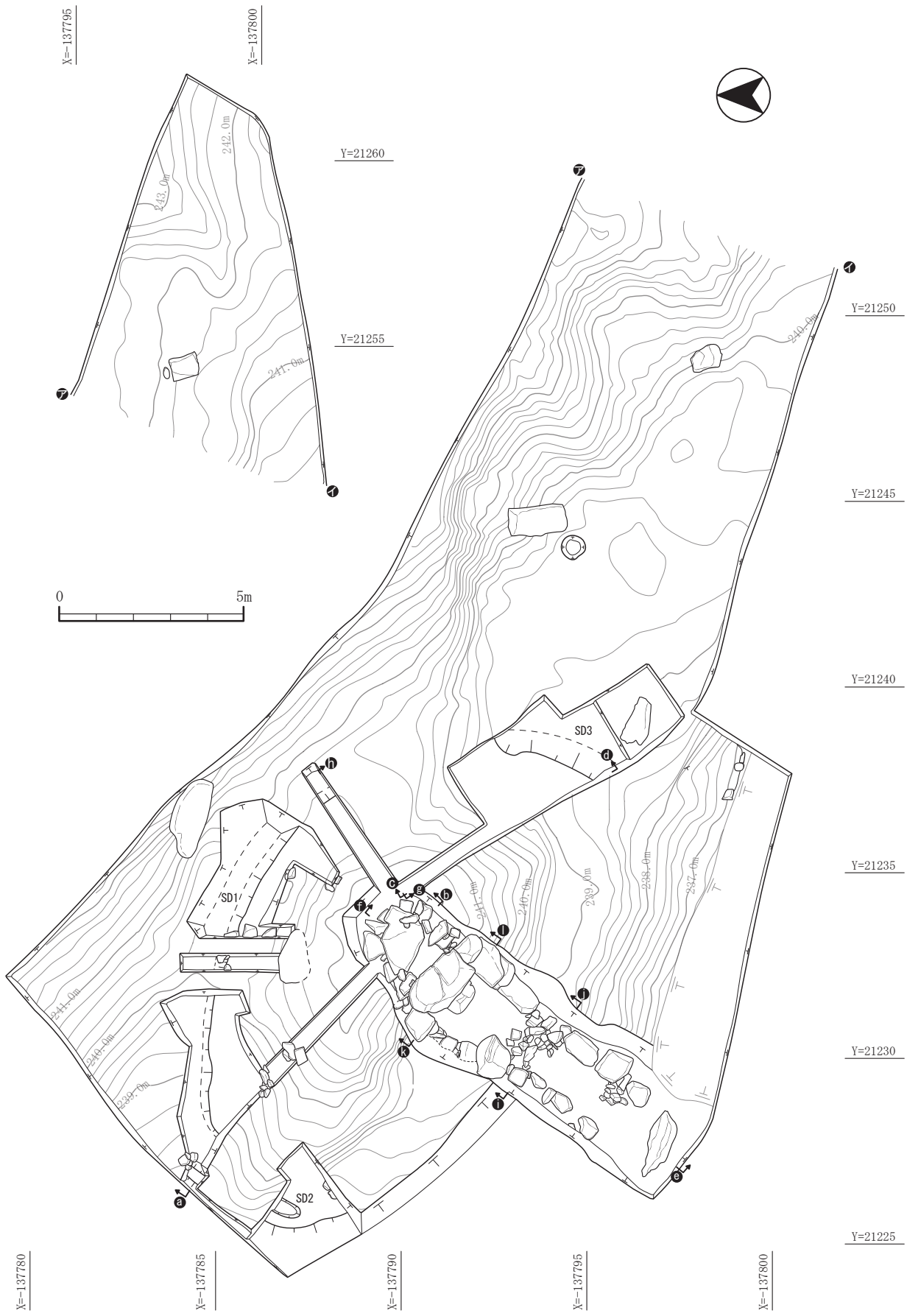
(2) 墳丘

調査の結果、部分的に墳丘盛土が良好に残存することが判明した。以下では、横穴式石室の構築過程と墳丘の構築過程の関係について整理する。

石谷1号墳の基本的な工程としては、以下の5工程に大きく分類できる。

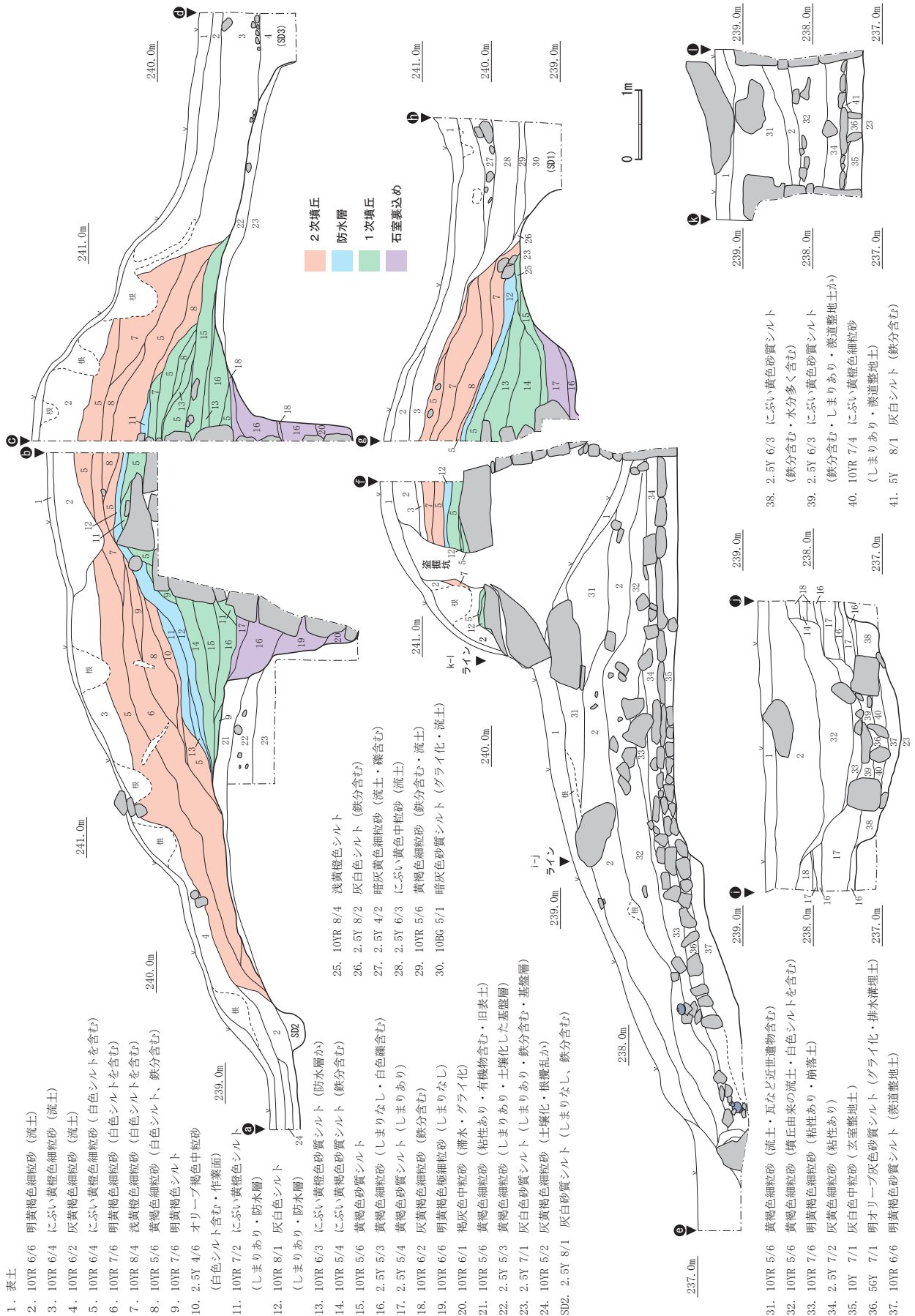
- ①旧地表面に墓壙を掘り込み、南側斜面を整地して平坦にする
- ②墓壙内に横穴式石室の下半を構築する
- ③石室壁が旧地表面に達した後は、石室上半を構築しながら盛土を行う(第1次墳丘)
- ④石室および第1次墳丘の構築が終了したら、防水のために墳丘面をよくしまったシルトで覆う
- ⑤防水層の上に追加の盛土をする(第2次墳丘)

工程① 土層観察の結果、基盤層である灰白色シルト(第5図23層)の上に旧表土(同21層)や黄褐色細粒砂からなる土壌化層(同22層)が観察でき



第4图 遺構平面図(1:150)

第5図 墳丘土層図(1:80)



る箇所がある。石室構築範囲ではこれは認められないため、旧地表面に墓壙を掘り込んでいる。一方、羨道南半では基盤層が南西に向かって落ち込んでおり、ここに明黄褐色砂質シルトを充填することで羨道床面を平坦に整地している（同 37 層）。以上の調査所見から、古墳築造前の旧地形は南西方向に落ち込む斜面地が復元でき、ここに墓壙を掘り込み、南側を整地することで石室築造の前準備を行っている。

工程② 墓壙内に石室の側壁および奥壁を構成する石材を配置する段階である（同 16～20 層）。石材の裏込めには灰白色シルトブロックを含む黄褐色系の細粒砂が用いられる。墓壙掘削で生じた排土を充填したものと推測される。また、これらの裏込め土の単位は側壁石材の単位と概ね対応し、石材の配置と裏込め土の充填を交互に行いながら側壁を構築していることが読み取れる。裏込め土の単位間にはしまりの強い灰黄褐色系細粒砂からなる層（同 18 層）が観察でき、作業面として古墳築造に従事した労働者が踏みしめた痕と思われる。

工程③ いわゆる 1 次墳丘を構築した段階である。石室壁が墓壙掘方よりも高くなった後は、石材を積み上げながら盛土を行い、1 次墳丘を構築している。盛土は黄褐色系細粒砂と灰白色シルトからなり、墓壙排土や墳丘周辺から採取した土を使っている（同 8 層他）。盛土の単位は側壁石材の単位と対応し、盛土と石材の積み上げを交互に行っていることが窺える。

工程④ 1 次墳丘を構築し終え、天井石を架けた後、この上にしまりの強い黄橙色シルトや灰白色シルトを面的に敷き詰めている（同 11・12 層）。石室および 1 次墳丘に雨水等が染み込むことを防ぐための機能が想定される（防水層）。なお、墳丘東側ではこのような層は検出できず、元々敷設しなかったのか、流出したのかは判断ができなかった。

工程⑤ いわゆる 2 次墳丘を構築した段階である。1 次墳丘を覆うように灰白色シルトブロックを含む黄褐色系細粒砂が盛られており、認識できた盛土の単位は 1 次墳丘のそれよりも大きい傾向がある。また現地表付近の墳丘盛土では土壌化が進み、単位が認識できない箇所もあるが、灰白色シルトブロック

を含む点で流土ではなく古墳に伴う盛土と判断した。なお、古墳の東側では林道によって墳丘が削平されており、2 次墳丘が検出できない箇所もみられた。

3 横穴式石室の調査

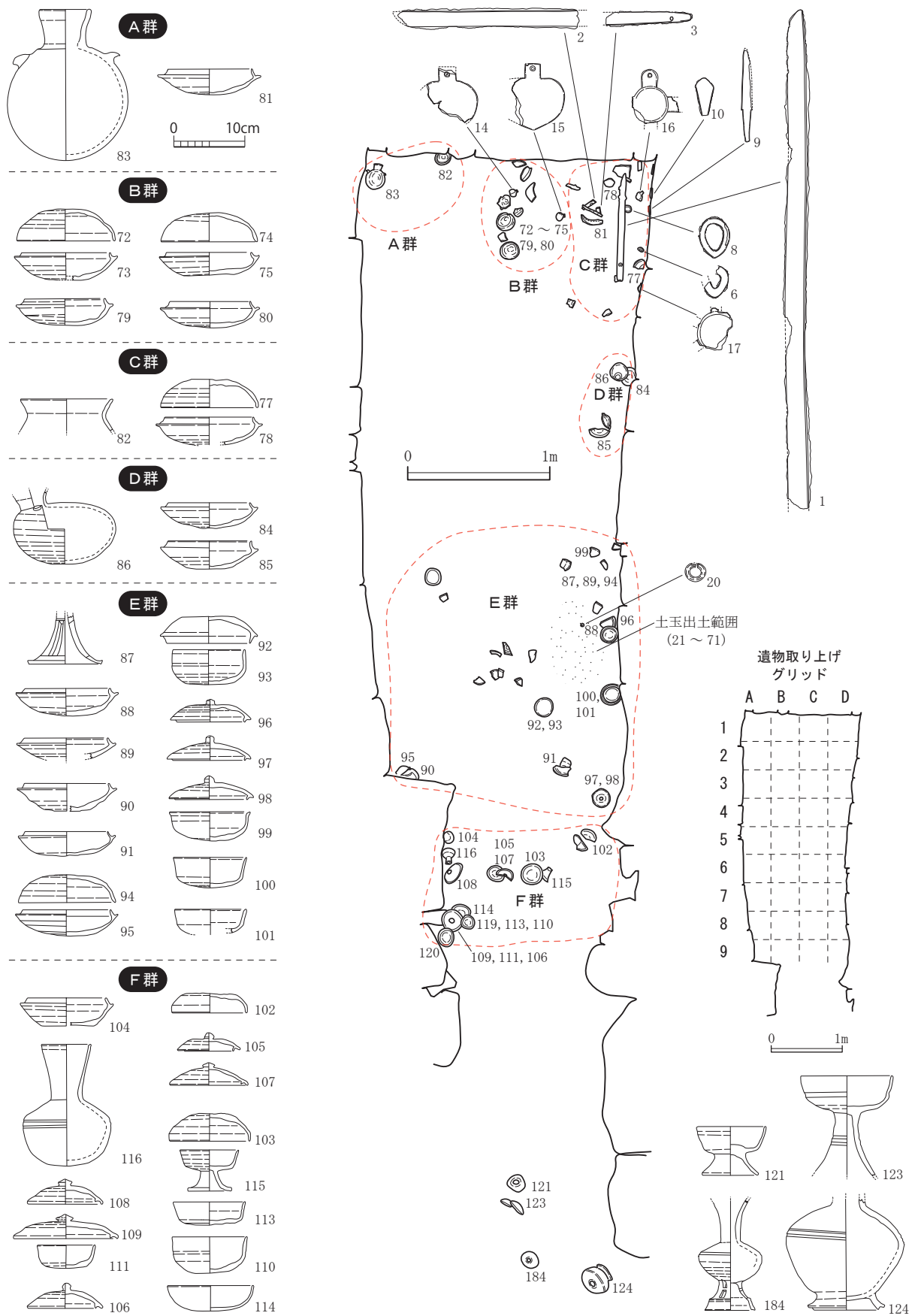
石谷 1 号墳の埋葬施設として、南西に開口する横穴式石室が 1 基確認された。南側は林道によって削平され、羨道部分の天井と側壁のほとんどが失われていた。一方、北側の大部分は損壊を免れており、玄室の天井石の内 1 つは原位置を保ち、奥壁と側壁北壁の残存状況は良好であった。ただし、天井石には人為的に移動させられた痕跡がみられ、石室内にはガラス瓶などの現代ゴミが散らばっていたため、盗掘を受けたことが窺える。

横穴式石室は右片袖式で、西側の袖石が内側に大きく突出している。主軸は N 37° E であり、南西の谷に向かって開口している。石室規模は残存長 8.7 m、玄室長 4.5 m、玄室幅 2.0 m、羨道残存長 4.2 m、羨道幅 1.1 m をそれぞれ測る。羨道は南側が完全に破壊されており、墓道などは確認できなかった。また、石室が破壊されている箇所に対して周囲に散乱している石材が少ない印象を受け、崩落した大型石材に近世の矢穴が確認できる事例もみられ、人為的に石材が運び去られている可能性が高い。以上を踏まえた上で、石室の各部位について詳述する。

(1) 玄室

奥壁 石室は全体的に中・小型の石材を用いて構築されており、奥壁についても同様である。奥壁最下段には幅 120cm ほどの比較的大型で平滑な面を持つ石材を使用している。ただし、この 1 枚だけで奥壁の全幅を満たすことはできず、左側壁との間に幅 60cm ほどの中型石材を 2 段積み上げている。また、敷石がある状態では基底石の半分以上は隠れている。奥壁は大きく分けて 6 段に積まれており、下から 4 段目までは幅 60～80cm の中型石材を配し、その間に間詰石を入れる一方で、上 2 段は幅 50cm 以下の小型の石材のみで構成している。

側壁 玄室の側壁は大小の不整形な石材を用いて構築しており、石材の積み方がやや乱雑である。横方



第7図 遺物出土状況図(石室は 1:40、遺物は 1:8)

向の目地の通りが確認できる箇所もみられ、大きく分けて5～6段に積まれる。また、左右の側壁で傾きが大きく異なり、右側壁はほぼ垂直に立ち上がるのに対し、左側壁は15度ほど内傾している。調査当初は石材の抜き取りにより傾いてしまったものと考えたが、仮に左壁が右壁と同様に垂直に立ち上がる場合、側壁最上段の幅に対して天井石の幅が足りなくなってしまう。これを踏まえると、後世の破壊活動による影響はあるものの、築造当初から左壁はある程度持ち送られていたと考える。

側壁の最下段には幅80cm前後の中型の石材を中心に用いられ、大きさのある程度揃えようとする意図が読み取れる。しかし、2段目以上では段内の石材の大きさは統一感がなく、4段目以上でも1mを超える大型の石材を部分的に用いる箇所がみられ、全体として不安定な印象を受ける。

袖部 袖石は高さ150cm・幅90cm・奥行110cmを測る縦長の大型石材を使用している。その上端は側壁4段目の上面と高さが一致する。袖石は玄室内側に大きく突出しており、片袖式を意識的に志向していることが窺える。

天井 大部分は林道によって削平されており、原位置を保つ天井石は1枚のみである。全長172cm・幅120cm・厚み60cmを測り、板石というよりは塊石状の石材である。明瞭な加工痕はみられない。墳丘上、および古墳周辺には同様の大きさの石材が散乱しており、削平・盗掘の際に外された天井石の一部と思われる。

床面 玄室内は盗掘に遭っているものの、床面は削平や攪乱を受けておらず、残存状況は良好である。しまりの強い灰白色砂質シルトからなる基盤層に灰白色中粒砂(35層)を充填し、その上に板石を敷いて床面を形成している。床面の中央には板石からなる石列が南北に2本通っており、石組の排水溝と考えられる。排水溝の上部は板石で蓋がされており、その上面のレベルは敷石面のそれと一致する。また玄室中央部には全長60～120cmの大型の板石が連なって敷かれている。棺台ないしは組合式石棺の底石が想定でき、近隣の辻堂古墳の床面の状況と酷似する。なお、石棺の側壁等は確認できず、盗掘に遭った際に持ち去られた可能性がある。

遺物出土状況 先述の通り玄室内は盗掘を受けていたものの、奥壁際の床面上からは原位置を保つ遺物がまとまって出土した。また、ふるいがけをした流土中からも土器破片や玉類が見つかった他、排水溝内からも土器類が出土した。なお、これらの遺物は石室内部に設定したグリッドごとに取り上げている(第7図)。

遺物の出土状況からA～E群を設定し、遺物群ごとに詳述する。

A1区のA群では敷石直上から須恵器の提瓶(83)と杯身(81)が出土した。いずれも完形品であり、原位置を保っていると判断できる。

C1区のB群では敷石直上および敷石の間から馬具の杏葉(14・15)と須恵器の杯身・蓋(72～75・79・80)が出土した。須恵器には破片や細片となった資料も含まれ、一部は原位置を保っていない可能性がある。

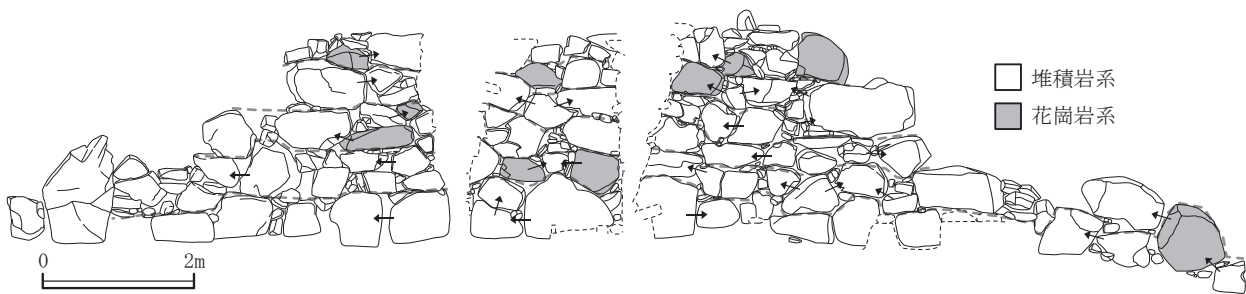
D1～2区のC群では敷石直上および敷石の間から直刀(1)、刀装具(6・8)、刀子(9)、鉄鏃等(10・11)馬具の辻金具(16)、雲珠(17)、須恵器杯身・蓋(77・78)、土師器甕(82)が出土した。1は長軸が側壁と並行して置かれており、原位置を保っている。床面から10cmほど浮いた流土内からは散乱した直刀片(2・3)や細片化した刀装具(4・5・7)が出土しており、基本的には攪乱を受けているものとみる。

D3～4区のD群では須恵器杯身(84・85)と平瓶(86)が敷石直上から出土した。いずれもほぼ完形の遺物である。

玄室の南半のE群では敷石直上から須恵器の杯・高杯等(87～101)が出土した。床面から10cmほど浮いた流土内からは耳環(20)と土製丸玉(21～71)が出土した他、蓋として転用された杯H身(92)が須恵器椀(93)と組み合せて出土した。一部原位置を留める完形品もみられるものの、破片資料が多く攪乱の影響を受けているものとみられる。

(2) 羨道

側壁 羨道が大きく削平されていることもあり、最下段の一部と2段目の石材が1箇所が残るのみで、残存状況は悪い。最下段および2段目の残存する石



第8図 石室構築過程および石材配置図(1:100)

材は玄室の同じ段のものと大きさは似ており、横方向に目地が通る箇所もみられる。ただし、羨道南側は基盤層自体が自然地形とも下がっており、石材が階段状に配されている。

床面 玄室内の石敷は玄門部まで続いているが、袖石より南では石敷は検出されず、2本の石列から成る排水溝のみが確認できた。基盤層上に明黄褐色砂質シルト(37層)で整地し、その上にしまりの強い黄色系の細粒砂等(39・40層)で貼床を形成している。排水溝はこの貼床層に掘り込まれ、溝の肩を石材で補強している。また、羨道床面の最下層からは、整地層に埋没した長径30cm前後の板石が側壁最下段の直下から出土した。この板石を羨道幅に配置した後に整地を行い、その上に側壁最下段の石材が設置されている。石室構築の最初の段階で、平面プランを確定するために小型の石材を配置していたようである。

閉塞 玄門部の床面上には、羨道と玄室を区切るように長径50cm前後の石材が並んで配置されている(第6図)。梱石のような機能も考えられるが、石材の上や隙間からは飛鳥時代の須恵器等(102~120)が多く出土しており、最終埋葬に伴う閉塞の痕跡とするのが妥当である。

遺物出土状況 玄門・羨道の床面及び流土内から須恵器と土師器が出土したほか、排水溝の埋土の中からも須恵器や馬具(18・19)が出土している。破片資料が多く、玄室出土の遺物よりも後世の攪乱による影響を大きく受けている。

4 石室構築過程と使用石材

(1) 構築過程

前節で述べた横穴式石室の調査時の観察所見を基に、石谷1号墳の石室構築過程について整理する。

なお、羨道と天井については損壊の程度が激しく、詳細な構築過程には言及できない。以下では現状で把握できた玄室壁体の構築過程について整理する。

石室の構築にあたって最初に設置された石材は、袖石と奥壁の基底石と推測される。北東隅・北西隅の最下段の石材も比較的大型であり、袖石と同時あるいはその前後に配置し、玄室平面規模を決定したと思われる。玄室側壁最下段は玄門側と奥壁側に2方向から石材を並べて形成されたと考えられよう。

一方で、2段目以上は必ずしも前述のような様相がみられるわけではなく、奥壁の中央から石材を配置する段も認められ、規則性は見出しにくい。また、最下段と比べると石材の大きさも不揃いで、1つの段内で部分的に2段にわかれる箇所がみられる。石材のばらつきを調整する意図が推測できる。

(2) 使用石材

石室に使用された石材は、堆積岩系と花崗岩系の2種類である。使用石材の8~9割は堆積岩系が占め、石谷古墳群周辺では堆積岩系の基盤岩がみられることから、在地で調達したものと考えられる。花崗岩系の石材は玄室側壁の3段目以上でみられ、堆積岩系のものと比べると中型以下の石材が中心である。服部川の上流域では花崗岩を基盤岩とする箇所もみられ、現在でも石谷古墳群付近の河原では堆積岩系と花崗岩系の両方の石材が確認できた。石室の上半で用いられる傾向をみると、石室構築途中で手近な堆積岩系の石材を使い果たしてしまい、古墳群の周辺から石材を集めた結果、混成した石材利用になったことが想像される。

IV 遺物

1 石谷1号墳出土遺物

石谷1号墳では、石室の南半が林道により削平されている上に、残存する玄室部分でも盗掘の痕がみられた。今回の調査で出土した遺物は、本来の副葬品の一部と考えられる。

出土遺物は石室内のもの、墳丘・周溝から出土したものに区別できる。なお、墳丘・周溝の遺物は僅かで、ほとんどは石室内からの出土である。石室床面直上からは鉄製品・須恵器・土師器が多く確認できた他、石室内流土をふるいがけした結果、鉄製品や玉類が出土した。

(1) 武器・工具類 (第9図)

床面直上および石室内流土より鉄刀3点、刀装具5点、刀子1点、鉄鏃4点が出土した。

鉄刀 1は大刀で、反りのない直刀である。残存長70.2cm、刀身幅2.8cm、棟厚0.7cmを測る。関部や茎部を欠損している。2は直刀の刀身片で、残存長25.7cm、刀身幅2.2cm、棟厚0.5cmを測る。

3は茎部片で全長12.2cm、幅2.1cm、厚み1cm前後を測り、側面が大きく錆膨れしている。茎尻側に楕円形の目釘孔が確認でき、柄装具に由来する木質が面的に付着している。

刀装具 4は鉄製柄頭の破片と考えられ、直径0.9cmほどの懸通孔が穿たれている。鉄板の厚みは0.3cm前後を測り、内面には部分的に木質が付着する。

5は「堰板」のある閉塞式(キャップ状)の鉄製鏝である。残存状況が悪く全形は不明だが、鉄板を倒卵形に折り曲げて成形している。

6・7は鉄製の責金具ないしは鏝である。6は倒卵形で、長軸4.5cm、短軸3.7cmを測る。錆膨れがひどく、現状では厚み0.6cmを測る。7は残存状況が悪く全形は不明だが、6よりも幅が広く、鏝に復元できる可能性がある。

8は責金具ないしは縁金具である。倒卵形で、長軸5.8cm、短軸4.4cm、厚み0.5cm前後を測る。端部には突起状に別個体の金属片が錆着しており、柄頭に伴う縁金具の可能性も考えられる。

刀子 9はほぼ完形の鉄製刀子で、全長12.8cm、茎

部長4.4cm、茎部幅1.0cm前後を測る。刃部は大きく錆膨れしており、本来の厚みは不明だが、茎部の状態は良好で厚み0.6cmを測る。関部は部分的に欠損しているが、直角関の両関に復元できる可能性が高い。茎部には繊維のようなものを巻いた痕跡が確認できる。

鉄鏃 玄室内部の流土をふるいがけした結果、鉄鏃の一部とみられる板状や棒状の鉄片(10～13)が出土した。

10は平根系の圭頭鏃の鏃身片である。幅2.5cm、厚み0.3cmを測り、非常に薄手であるが、先端部分には刃部を形成するため鉄鏃と判断した。

11～13は棒状鉄片で、鉄鏃や鉄釘の可能性がある。11は幅・厚みともに0.6cmを測り、方形の断面を持つ。12・13は幅・厚みともに0.3cm前後で、方形の断面を持ち、先端は細くなっている。

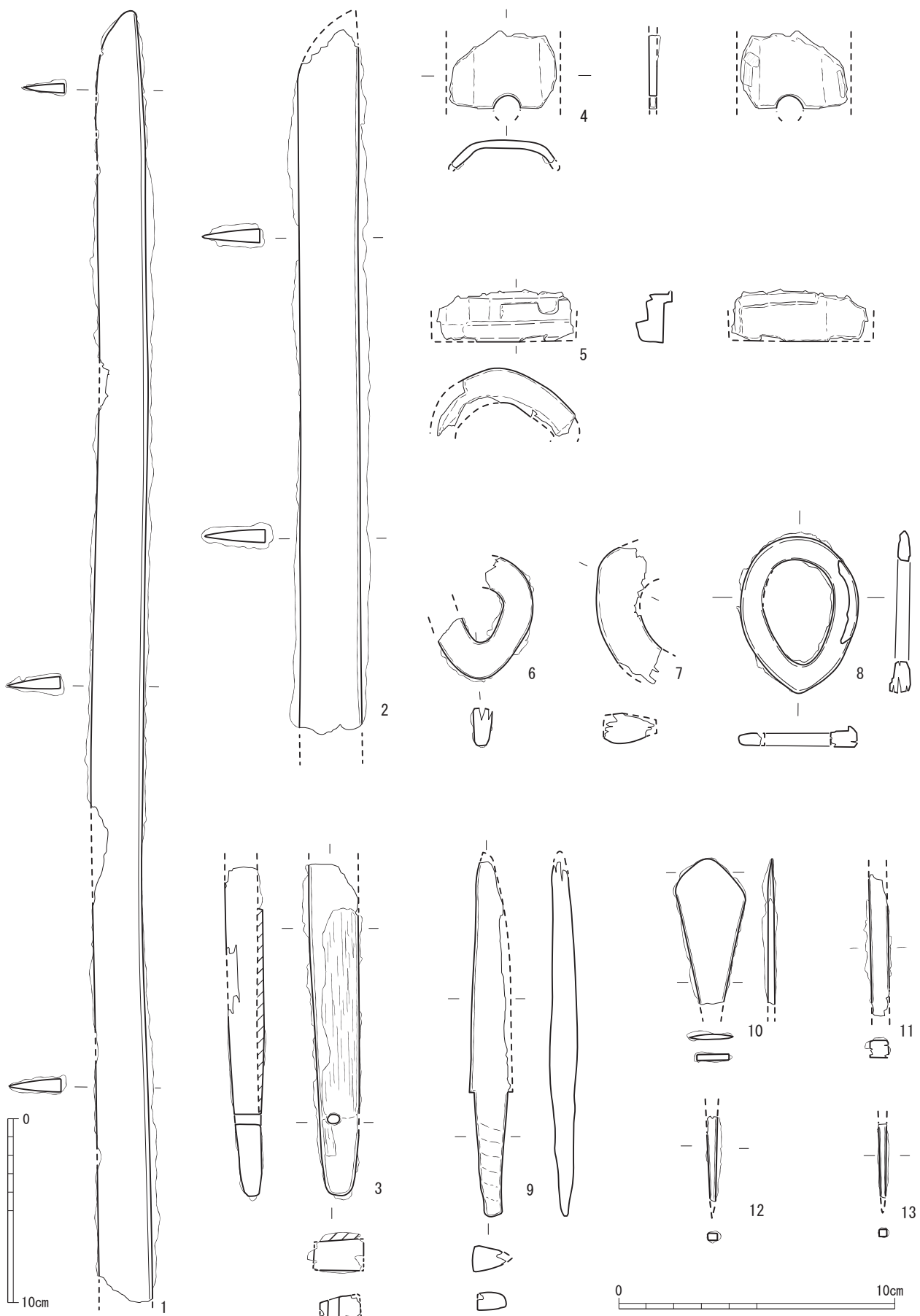
(2) 馬具類 (第10図)

床面直上より杏葉2点、辻金具1点、雲珠1点、羨道排水溝埋土内から絞具片2点が出土した。

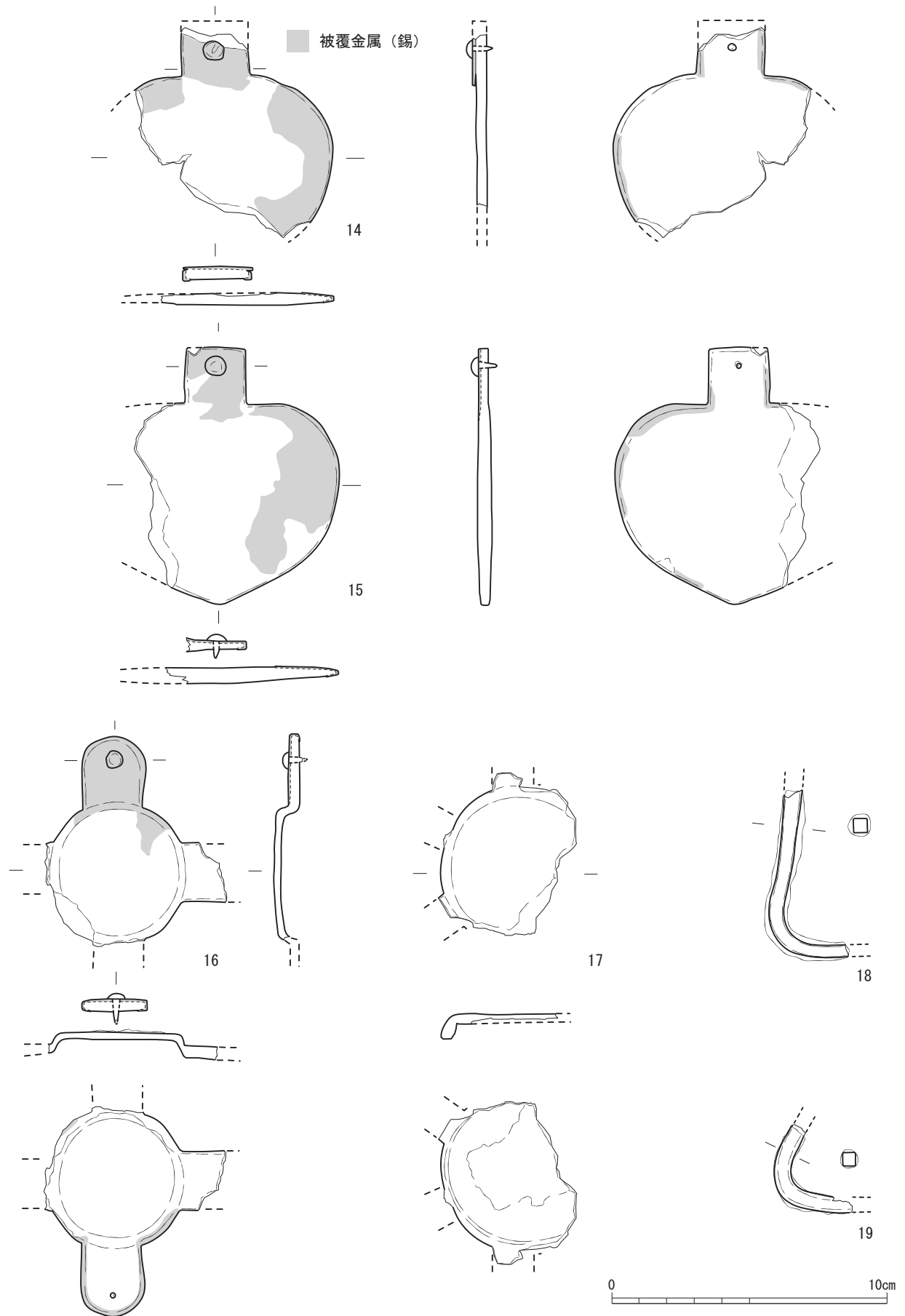
杏葉 鉄地錫張心葉形杏葉が2点(14・15)出土した。全長9.3cm、幅は8.4cmに復元できる。立間は幅2.3cm、高さ2.0cmを測り、中央には大型の鉾が1箇所打たれる。立間孔を持たず、革帯に直接鉾を打って杏葉を固定していたことが推察できる。肉眼観察および蛍光X線元素マッピングによって表面に錫の薄板で覆っていることが確認でき、錫板の端部を杏葉の裏面に巻き付けることによって固定していることが考えられる。

辻金具 鉄地錫張四脚辻金具が1点(16)出土した。鉢部の平面形は正円形を呈し、直径は4.9cmを測る。脚部は幅2.2cm、長さ2.4cmを測り、端部は半円形を呈し、1箇所に大型の鉾が打たれる。肉眼観察および蛍光X線元素マッピングによって表面に錫の薄板で覆っていることが確認でき、錫板の端部を辻金具の裏面に巻き付けることによって固定していることが考えられる。

雲珠 鉄地錫張雲珠ないしは辻金具が1点(17)出土した。取り上げ時は辻金具としたが、16と比較



第9図 出土遺物実測図(武器・工具)(1は1:3、他は1:2)



第10图 出土遺物実測図(馬具)(1:2)

するとやや大型で、脚部が四方にのびないことを勘案し、雲珠とした。脚部は大きく破損しているが、六脚に復元できる可能性が高い。鉢部の平面形は正円形に復元される。肉眼観察では確認できなかったものの、蛍光X線元素マッピングによって表面に錫の薄板が部分的に確認でき、他の馬具と同様に鉄地に錫の薄板を巻いていることが判明した。

絞具 革帯等をつなぎ留める鉄製絞具2点(18・19)が羨道排水溝内の流土から出土した。2点とも輪金のみで、横断面形は方形を呈し、径0.5cmの棒状鉄素材を折り曲げて製作している。

(3) 装身具類 (第11図)

耳環 玄室内の床面からやや浮いた位置から1点(20)出土した。長軸3.0cm・短軸2.6cm・厚み0.6cmを測り、肉眼観察の結果、外表はやや黄色がかった白銀色を呈し、欠損箇所からは内部の緑青が見える。蛍光X線分析から、芯部には銅を主成分とし、その上に銀板を巻いたあとに鍍金をしていることが判明した。

土製丸玉 玄室内(D8・9地区)の埋土をふるいにかけての結果62点(21～71)が確認された。径5mm・厚さ3.3mm・孔径1mm前後を測る。2・3個が連なって塊になったものもみられ、細い棒ないしは紐に連ねて焼成したようである。

(4) 土器類 (第12～15図)

①床面出土

玄室床面(A～E群) 玄室の床面から出土した土器はA～E群を設定した。A～C群は奥壁沿いから出土し、須恵器の杯H、提瓶、土師器甕がある。

72・74・77は杯Hの蓋で、口径は13.5cm前後を測る。73・75・76・78～81は杯Hの身で、口径は11.2～12.4cmを測る。74・78～81では頂部や底部の外面最終調整にロクロケズリを施すが、そのほかはヘラ切り後調整を行わない。

83は須恵器提瓶で、体部外面の全面にカキメが巡るほか、把手は突起状に退化している。

82は土師器甕で「く」の字状の口縁部を持ち、外面にはハケ調整を施すが、全体的に器面の摩滅が激しく詳細な調整は不明である。

D・E群は東壁沿いから出土しており、須恵器杯H、杯G、高杯、椀、平瓶がある。D群は杯Hを中心に構成されるが(84・85)、E群や玄門付近の床面出土土器は杯Hと杯Gが混成する。

84・85・88～92・94・95は杯Hの身・蓋である。94・95は頂部や底部の外面最終調整にロクロケズリを施し、蓋口径は13.5cm、身口径は11.9cmと比較的大型である。また、外面には鳥の足跡のようなヘラ記号が入る。その他の底部はすべてヘラ切り未調整で、身口径は11.4～12.3cmとバラつきがある。

96～101は杯Gの身・蓋で、蓋口径は10cm前後、身口径は10～11cm前後をそれぞれ測る。93は椀で、92を蓋にして出土した。

86は平瓶である。肩部にボタン状付文を張り付け、体部下半にロクロケズリを施す。

87は高杯の脚部で、2段3方向スカシを穿つ。

玄門床面(F群) 閉塞石と袖石の間から須恵器の杯H、杯G、高杯、椀、長頸壺、土師器杯が出土した。

102～104は須恵器杯Hの身・蓋で、蓋口径は10～11cm前後、身口径は11cmと全体的に小型である。いずれも頂部や底部はヘラ切り無調整で、102には外面には「→」のようなヘラ記号が入る。

105～113は須恵器杯Gの身・蓋で、蓋口径は7～14cm前後、身口径は8～10cm前後を測る。106～109では蓋の受け部の退化が著しく、107～109では扁平な摘部が付く。113には底部外面に「×」のようなヘラ記号が入る。110は椀である。

115は須恵器高杯で、口径は8.2cmを測り、脚部にスカシ孔が入らない。

116は須恵器長頸壺で、肩部に沈線が2条入る。

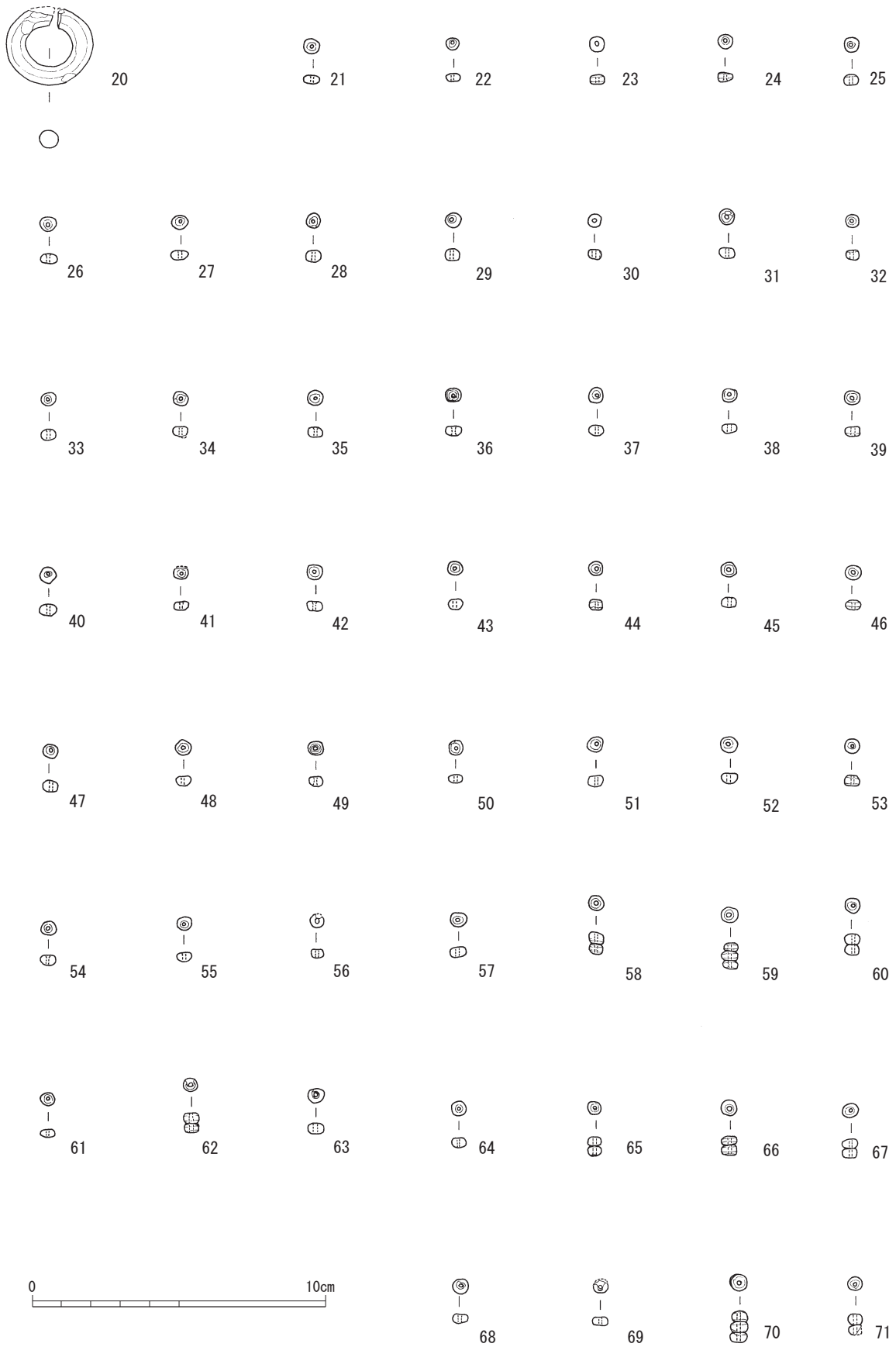
114は土師器杯で、底部にケズリ調整が確認できるが、器面の摩滅が激しく内面調整は不明である。

羨道床面 杯H、杯G、高杯、長頸壺が出土した。

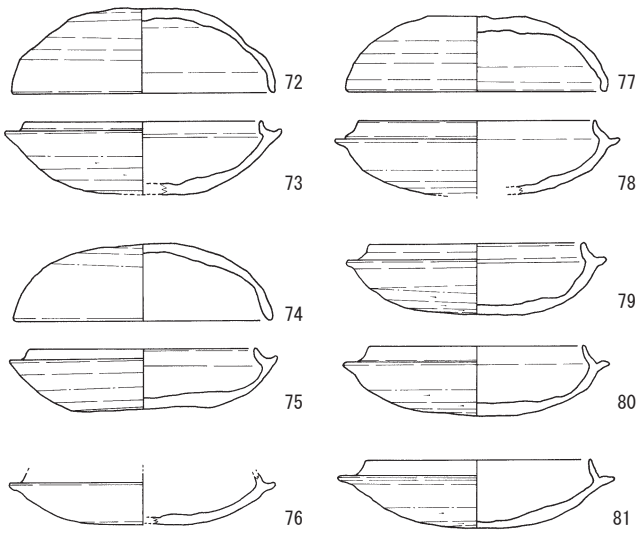
117・118は須恵器杯Hで、蓋は口径12.9cm、身は11.4cmを測る。いずれも頂部・底部はヘラ切り無調整である。

119・120は須恵器杯Gで、蓋は口径10.8cm、身は口径9.6cmを測る。120は底部外面に「×」のヘラ記号が入る。

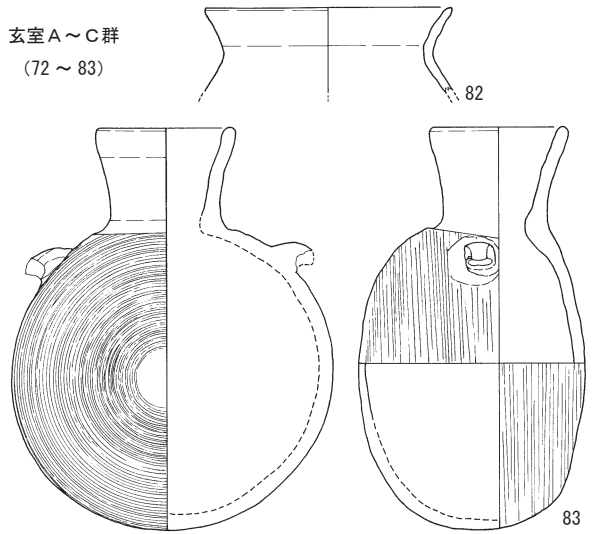
121・123は須恵器高杯で、ともに脚部にスカシが入らない。123は脚部中ほどに2条の沈線が入る。



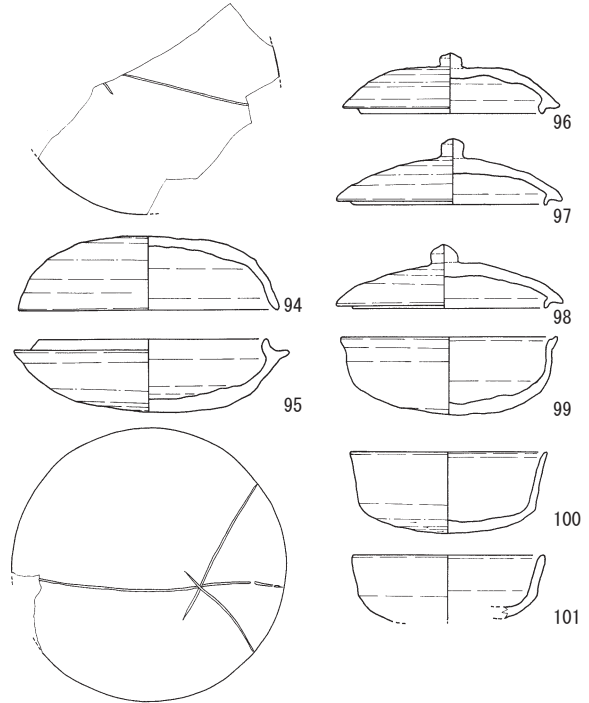
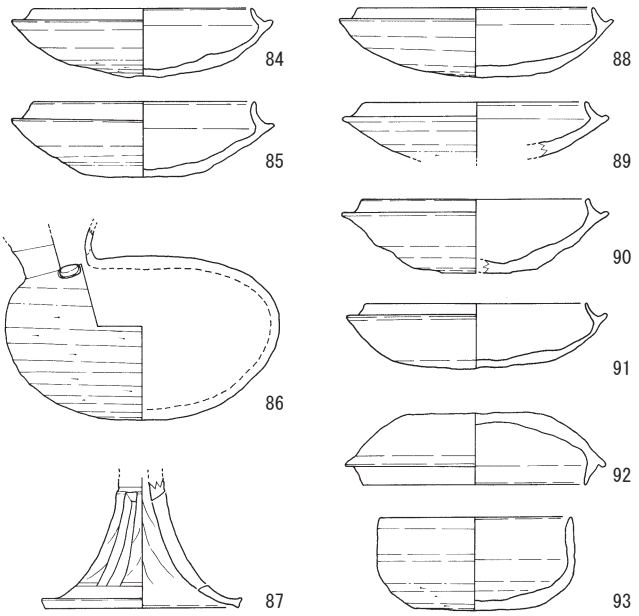
第11图 出土遗物实测图(装身具)(1:2)



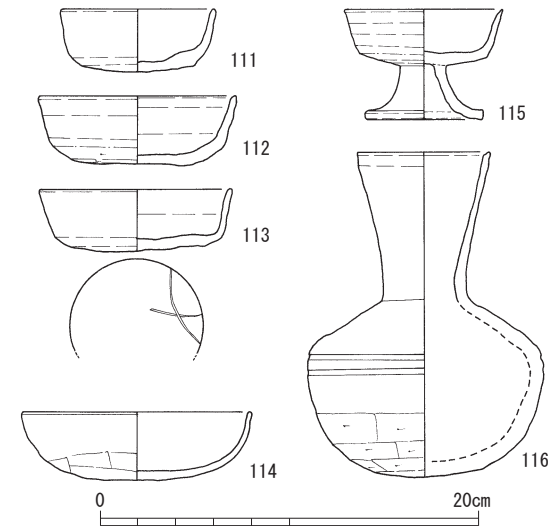
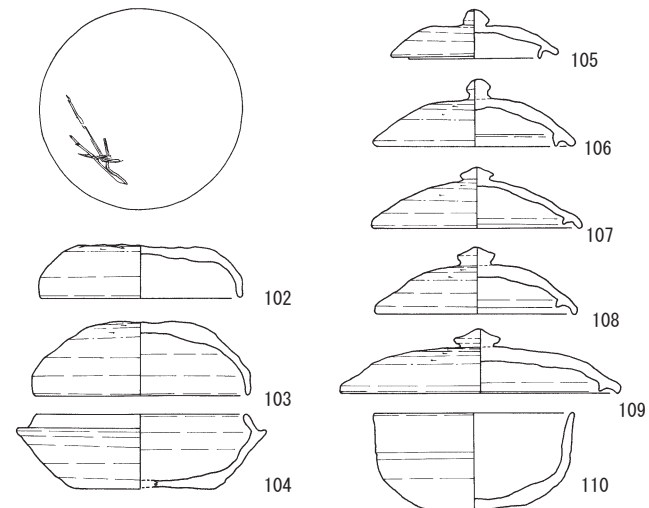
玄室A~C群
(72~83)



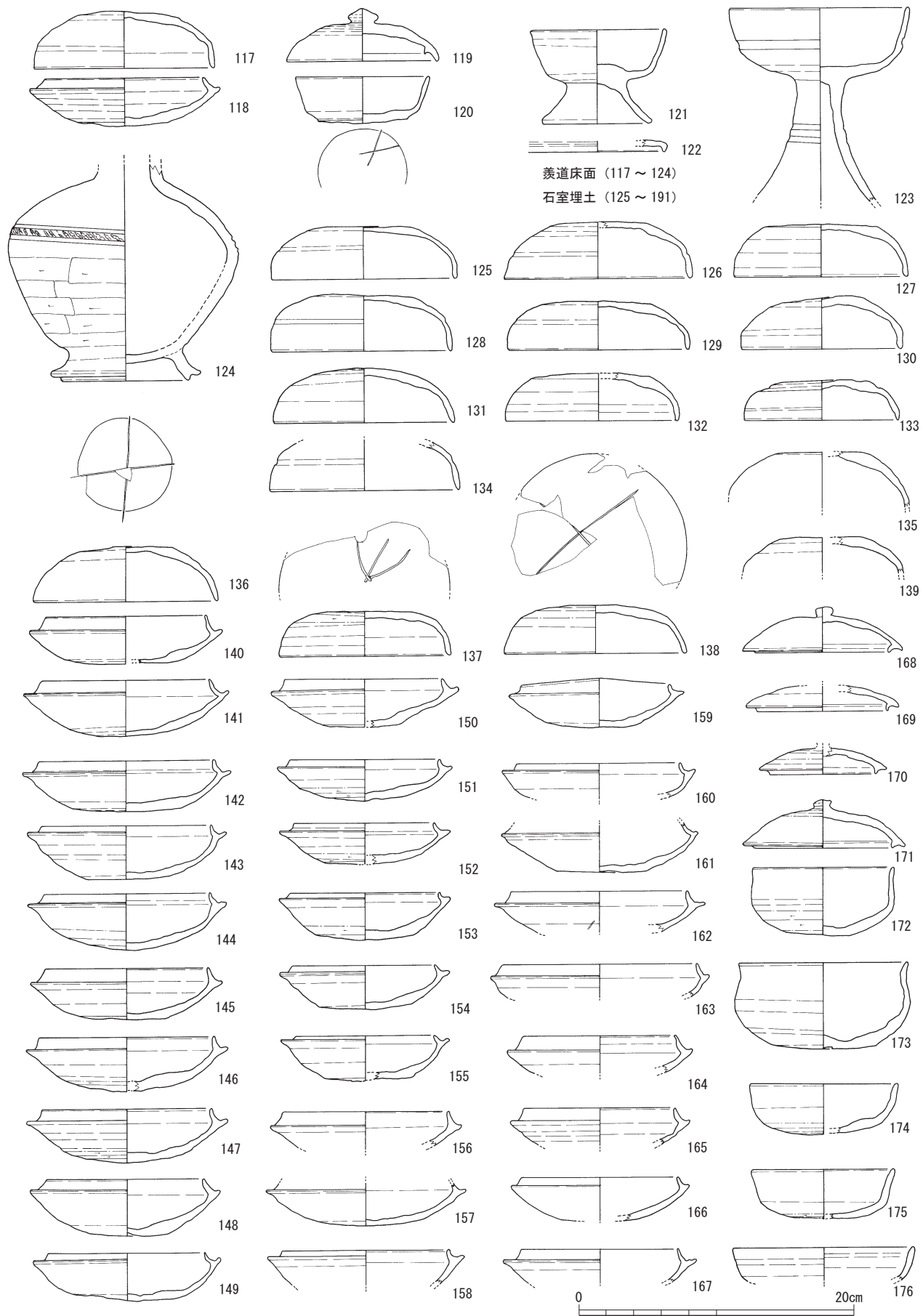
玄室D・E群・その他床面 (84~101)



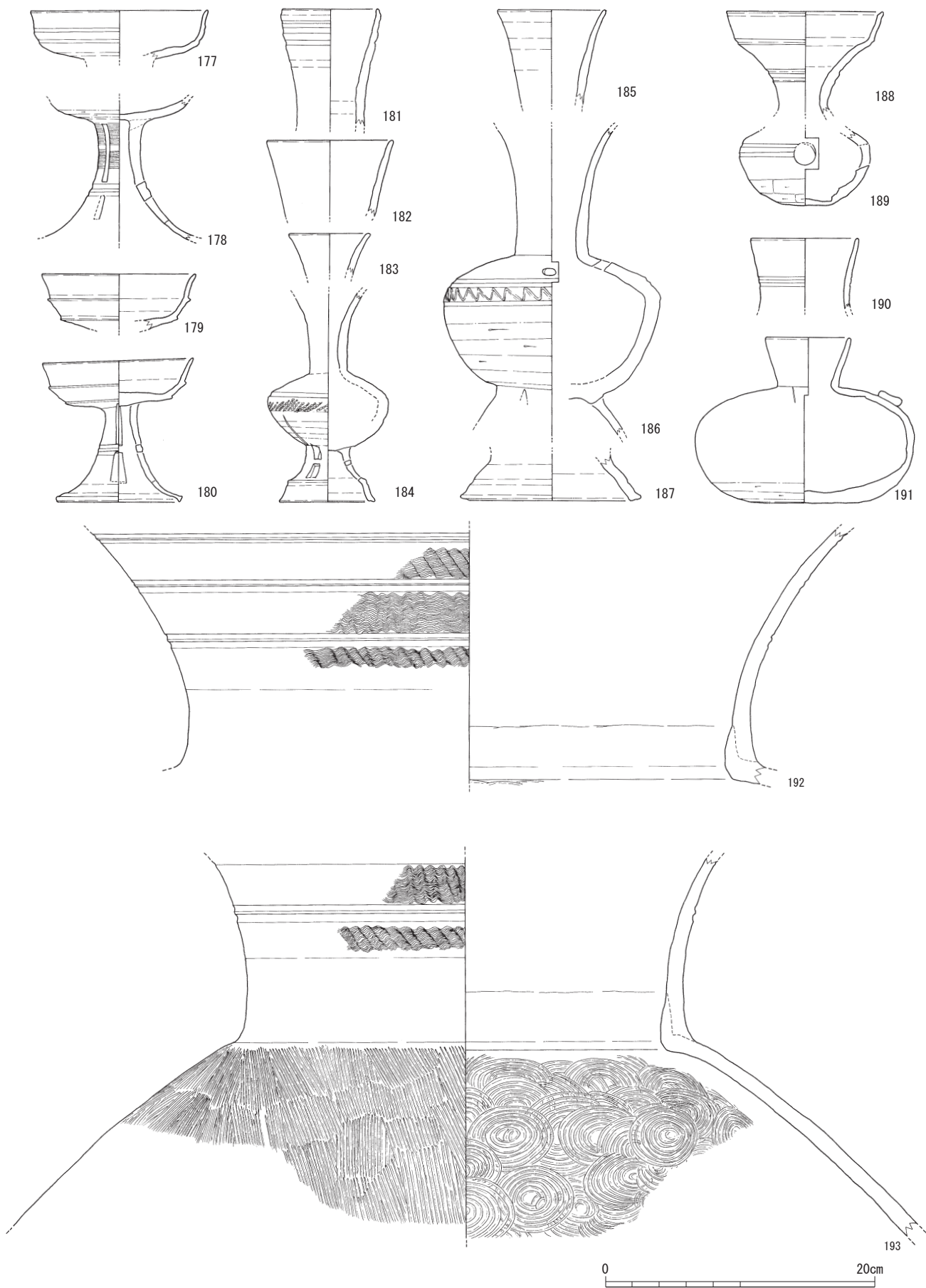
玄門床面 (102~116)



第12図 出土遺物実測図(土器1)(1:4)



第13図 出土遺物実測図(土器2)(1:4)



第14图 出土遺物実測図(土器3)(1:4)

124 は須恵器の脚付長頸壺で、肩部に刺突文帯と2条の沈線が巡る。体部外面には回転ケズリを施す。

②埋土・流土出土

石室埋土 石室内の埋土からは須恵器の杯H、杯G、高杯、椀、脚付長頸壺、甕、瓶類が出土した。

125～139は杯Hの蓋である。口径は11～13.5cm前後に収まり、頂部の外面調整はロクロケズリを施す。128・137・138を除くと全てヘラ切り無調整である。136～138は頂部外面に「×」などのヘラ記号が入る。

140～167は杯Hの身である。口径は10～12.5cm前後を測り、低部外面の最終調整はロクロケズリを施す。142・144を除くと全てヘラ切り無調整である。ただし、ヘラ切前にロクロケズリを施すもの(145～147・151～153)と、それ以外のロクロナデのみのものが混在する。

168～171・174・175は杯Gである。168～171は蓋で、口径は7.5～10cm前後に収まる。174・175は身で、口径は10.5cm前後を測る。168を除くと蓋の受け部の退化が著しい。172・173は椀で、173は他の椀よりも大型である。

176～180は高杯である。178は幅0.4cmの細い2段3方向スカシ、180は2段2方向スカシを穿つ。179、180は身部に明瞭な稜線を有する。

181～187は長頸壺である。181・182・187は脚付長頸壺で、181は肩部に焼成後穿孔を2箇所施し、甕のような用途が想定できる。187は脚部に方形の2段3方向スカシを穿つ。

188・189は甕で、同一個体の可能性がある。

190・191は瓶類である。191は平瓶で、ボタン状付文が肩部に貼り付けられる。

墳丘流土 墳丘の調査の際には流土内からは須恵器の甕と壺が出土した。甕の破片が最も多く、墳丘上あるいは墳丘周辺での葬送儀礼で用いられたものの可能性がある。

192～194は須恵器の甕である。192・193ともに大甕で、頸部内径は192では38cm、193では28cmをそれぞれ測る。頸部外面には沈線に区画された波状文帯が巡り、体部外面にはタタキ、内面には青海波文の当て具痕が残る。194は甕の口縁部細片で、口径は不明である。

195・196は須恵器脚付壺の脚台部片である。台径は195で13.0cm、196で17.8cmをそれぞれ測る。

2 石谷遺跡出土遺物

表土からは近世以降の陶磁器や銃弾が出土した。

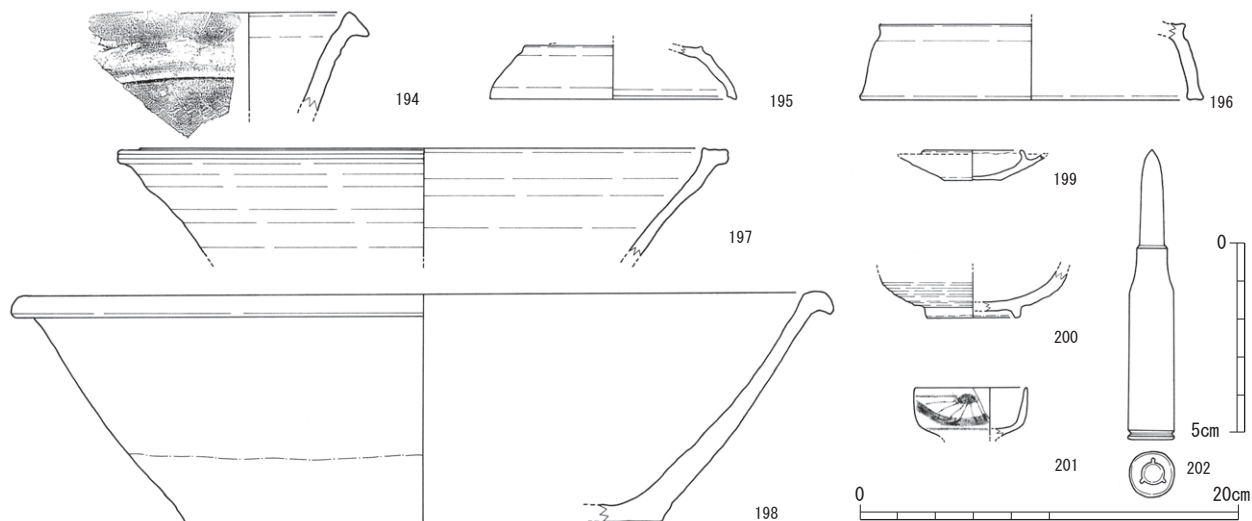
陶器 197・198・199は京・信楽系の陶器である。197・198は鉢である。199は灯明皿である。

200は瀬戸・美濃系陶器の椀である。

磁器 201は瀬戸・美濃系磁器の仏飯器である。外面には赤絵の車文を配す。

金属製品 202は1907年に帝国陸軍に採用された三八年式実包である。全長7.6cm、最大径1.2cmを測り、5発が挿弾子に収まった状態で出土した。

いずれも18世紀以降の所産で、近世以降当地が農業や林業のために開発を受けたことが窺える。



第15図 出土遺物実測図(土器4)(1:4、202は1:2)

第1表 金属製品観察表

NO	実測番号	種類	器種	地区	遺構層位	部位残存度	法量 (cm)			特記事項
							全長	幅	厚み	
1	035-01	鉄製品	鉄刀	南区	玄室 F 7	一部欠	(70.2)	2.8	0.7	
2	035-02	鉄製品	鉄刀	南区	玄室 F 3・4・9	一部欠	(25.7)	2.2	0.5	
3	031-01	鉄製品	鉄刀	南区	玄室 F 6	一部欠	(12.2)	2.1	1.0	木質 (圧痕か) 付着
4	033-02	鉄製品	柄頭か	南区	玄室・C 1 F 2 2	一部欠	(2.8)	(3.8)	0.3	木質付着
5	033-01	鉄製品	鎌か	南区	玄室・D 2 F 1 8	一部欠	(5.0)	(2.0)	1.0	
6	032-02	鉄製品	責金具か	南区	玄室 F 1 3	一部欠	(4.5)	(3.7)	0.6	
7	032-03	鉄製品	鏝か	南区	玄室・D 2 F 1 9	一部欠	(4.0)	(1.0)	(1.2)	
8	031-04	鉄製品	責金具か	南区	玄室 F 8	一部欠	5.8	4.4	0.5	縁金具の可能性もあり
9	031-02	鉄製品	刀子	南区	玄室 F 1 2	ほぼ完形	12.8	1.5	(0.6)	茎部に繊維 (圧痕か) 付着
10	031-05	鉄製品	鉄鏃	南区	玄室 F 1 1	一部欠	(5.5)	2.5	0.3	圭頭鏃か
11	031-03	鉄製品	鉄釘か	南区	玄室 F 1 0	一部欠	(5.0)	0.6	0.6	
12	032-06	鉄製品	不明鉄器	南区	玄室・D 1 F 2 3	一部欠	(3.1)	0.4	0.3	
13	032-07	鉄製品	不明鉄器	南区	玄室・C 2 F 2 4	一部欠	(2.7)	0.4	0.3	
14	034-01	鉄製品	杏葉	南区	玄室 F 1	一部欠	(7.5)	(7.0)	0.5	鉄地錫張
15	034-02	鉄製品	杏葉	南区	玄室 F 2	一部欠	9.3	(7.5)	0.5	鉄地錫張
16	034-03	鉄製品	辻金具	南区	玄室 F 1 4	一部欠	(8.0)	(6.5)	0.5	鉄地錫張
17	034-04	鉄製品	雲珠か	南区	玄室 F 1 7	一部欠	(6.0)	(3.0)	0.4	鉄地錫張
18	032-04	鉄製品	絞具	南区	羨道排水溝内 F 2 0	一部欠	(6.0)	(2.5)	0.5	
19	032-05	鉄製品	絞具	南区	羨道排水溝内 F 2 1	一部欠	(3.0)	(2.8)	0.5	
20	032-01	銅製品	耳環	南区	玄室 F 1 5	ほぼ完形	3.0	2.6	0.6	銅芯→銀/錫箔→鍍金
202	033-03	鉄製品	銃弾	東区	表土	完形	7.6	1.2	1.2	三八年式実包

第2表 土製品観察表①

NO	実測番号	種類	器種	調査区	地区	部位残存度	法量 (cm)			重さ (g)	特記事項
							径	孔径	厚さ		
21	011-11	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.51	0.12	0.3	0.09	
22	011-16	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.49	0.1	0.29	0.07	
23	010-19	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.53	0.15	0.33	0.1	
24	010-14	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.48	0.1	0.32	0.09	
25	010-09	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.53	0.1	0.33	0.11	
26	011-01	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.54	0.1	0.33	0.09	
27	011-06	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.56	0.1	0.31	0.08	
28	011-12	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.5	0.13	0.35	0.1	
29	011-17	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.52	0.1	0.41	0.12	
30	010-20	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.44	0.1	0.34	0.06	
31	010-15	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.51	0.1	0.35	0.1	
32	010-10	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.44	0.12	0.32	0.12	
33	011-02	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.51	0.15	0.35	0.09	
34	011-07	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	一部欠	0.5	0.1	0.35	0.09	
35	011-13	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.52	0.1	0.33	0.1	
36	011-18	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.59	0.13	0.31	0.09	
37	010-21	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.53	0.1	0.33	0.1	
38	010-16	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	一部欠	0.52	0.12	0.31	0.08	
39	010-11	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.52	0.12	0.33	0.1	
40	011-03	練土玉	丸玉	南区	玄室・D 8 土洗い	完形	0.58	0.15	0.43	0.13	

第3表 土製品観察表②

NO	実測 番号	種類	器種	調査区	地区	部位 残存度	法量 (cm)			重さ (g)	特記事項
							径	孔径	厚さ		
41	011-08	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	一部欠	0.5	0.1	0.3	0.08	
42	011-14	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.53	0.1	0.33	0.1	
43	011-19	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.53	0.12	0.35	0.12	
44	010-22	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.49	0.1	0.35	0.1	
45	010-17	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.52	0.13	0.31	0.09	
46	010-12	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.51	0.1	0.33	0.09	
47	011-04	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.5	0.12	0.39	0.09	
48	011-09	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.49	0.1	0.31	0.09	
49	011-15	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.5	0.13	0.33	0.08	
50	011-20	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	一部欠	0.49	0.1	0.29	0.08	
51	010-23	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.48	0.1	0.38	0.09	
52	010-18	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.55	0.15	0.36	0.11	
53	010-13	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.48	0.38	0.1	0.09	
54	011-05	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.51	0.12	0.35	0.09	
55	011-10	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.51	0.12	0.32	0.07	
56	010-04	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	一部欠	0.43	0.13	0.32	0.06	
57	011-27	練土玉	丸玉	南区	玄室・D9 土洗い	完形	0.56	0.1	0.34	0.1	
58	010-05	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.45	0.11	0.38	0.18	
						完形	0.46		0.32		
59	010-01	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.44	0.1	0.28	0.24	
						完形	0.48		0.33		
						完形	0.46		0.32		
60	011-24	練土玉	丸玉	南区	玄室・D9 土洗い	完形	0.51	0.12	0.36	0.19	
						完形	0.49		0.32		
61	011-21	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.51	0.1	0.27	0.07	
62	010-03	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	一部欠	0.53	0.1	0.37	0.19	
						完形	0.49		0.3		
63	010-08	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.53	0.15	0.35	0.1	
64	011-26	練土玉	丸玉	南区	玄室・D9 土洗い	完形	0.5	0.12	0.35	0.08	
65	010-06	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.47	0.1	0.28	0.15	
						完形	0.47		0.34		
66	010-07	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.5	0.15	0.33	0.17	
						完形	0.52		0.3		
67	011-25	練土玉	丸玉	南区	玄室・D9 土洗い	完形	0.51	0.1	0.33	0.19	
						完形	0.52		0.31		
68	011-28	練土玉	丸玉	南区	玄室・D9 土洗い	完形	0.57	0.12	0.3	0.1	
69	011-22	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	一部欠	0.52	0.1	0.32	0.07	
70	010-02	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.5	0.12	0.39	0.32	
						完形	0.52		0.33		
						完形	0.52		0.32		
71	011-23	練土玉	丸玉	南区	玄室・D8 土洗い	完形	0.51	0.1	0.34	0.15	
						一部欠			0.36		

第4表 土器観察表①

No	実測番号	種類	器種	地区	遺構層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高			
72	024-01	須恵器	杯H蓋	南区	玄室 P 2 0	口縁部 6/12	13.6		4.5	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰白	
73	021-07	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 1 9	口縁部 6/12	12.4		3.9	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ・ヘラ切り	灰	
74	028-02	須恵器	杯H蓋	南区	玄室 P 2 1	口縁部 5/12	13.4		4.1	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	青灰	
75	026-01	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 2 1	口縁部 8/12	12.0		3.3	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ・ヘラ切り	灰	
76	028-04	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 1 8	小片				内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰白	表面摩滅
77	027-02	須恵器	杯H蓋	南区	玄室 P 2 6	口縁部 1/12	13.4		3.0	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰白	
78	028-05	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 2 7	口縁部 2/12	12.4			内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	灰	
79	026-02	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 2 2	完形	11.2		3.8	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	青灰	
80	028-03	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 1 8	口縁部 10/12	11.2		3.7	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	青灰	
81	023-03	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 1 7	口縁部 9/12	11.8		3.6	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	灰	
82	027-04	土師器	甕	南区	玄室 P 2 5	口縁部 1/12	12.8			内：摩滅 外：ハタ	浅黄橙	表面摩滅
83	022-01	須恵器	提瓶	南区	玄室 P 1 6	口縁部 11/12	6.8		21.3	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ハタ	灰	
84	026-03	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 2 9	口縁部 11/12	11.4		3.7	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ・ヘラ切り	灰白	
85	026-04	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 3 0	口縁部 9/12	11.7		4.0	内：ロコナテ・ナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	褐灰	
86	023-01	須恵器	平瓶	南区	玄室 P 2 8	体部 完形			8.7	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	灰白	
87	024-03	須恵器	高杯	南区	玄室 P 3 1	底部 6/12		10.0		内：ロコナテ 外：ロコナテ	灰	3方スジ
88	024-04	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 3 2	口縁部 9/12	12.3		3.7	内：ロコナテ 外：ロコナテ	灰白	
89	027-03	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 3 1	口縁部 4/12	11.6			内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	灰白	
90	028-07	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 3 8	口縁部 4/12	11.8		3.9	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	青灰	
91	028-06	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 3 6	口縁部 6/12	11.6		3.5	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰白	
92	005-05	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 8 - 1	口縁部 10/12	11.8		3.9	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	蓋に転用 22とセット関係
93	005-06	須恵器	椀	南区	玄室 P 8 - 2	口縁部 7/12	10.1		4.9	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ・ヘラ切り	灰	21とセット関係
94	024-02	須恵器	杯H蓋	南区	玄室 P 3 1	口縁部 5/12	13.5		3.9	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	青灰	
95	025-04	須恵器	杯H身	南区	玄室 P 3 8	口縁部 11/12	11.9		3.9	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	灰白	ヘラ記号
96	025-01	須恵器	杯G蓋	南区	玄室 P 3 3	完形	9.5		3.2	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	灰白	
97	025-03	須恵器	杯G蓋	南区	玄室 P 3 7	口縁部 11/12	10.0		3.5	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	灰	
98	025-02	須恵器	杯G蓋	南区	玄室 P 3 7	口縁部 11/12	10.0		3.4	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	灰白	
99	026-05	須恵器	杯G身	南区	玄室 P31・34	口縁部 8/12	11.3		4.1	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	
100	004-03	須恵器	杯G身	南区	玄室 P 9 - 1	完形	10.2		4.3	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	灰	
101	005-07	須恵器	杯G身	南区	玄室 P 9 - 2	口縁部 11/12	10.0			内：ロコナテ 外：ロコナテ	灰	
102	009-02	須恵器	杯H蓋	南区	玄門 P 1 4	口縁部 9/12	10.4		2.8	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ・ヘラ切り	灰白	
103	009-01	須恵器	杯H蓋	南区	玄門 P 1 3 - 1	口縁部 8/12	11.2		3.9	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ・ヘラ切り	明紫灰	
104	005-04	須恵器	杯H身	南区	玄門 P 7 - 3	口縁部 6/12	11.0		4.0	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	
105	006-03	須恵器	杯G蓋	南区	玄門 P 1 2 - 1	完形	6.8		2.6	内：ロコナテ 外：ロコナテ	灰白	
106	005-02	須恵器	杯G蓋	南区	玄門 P 5 - 3	口縁部 10/12	10.2		3.4	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	黄灰	
107	028-01	須恵器	杯G蓋	南区	玄門 P 1 2 - 2	口縁部 11/12	10.8		3.2	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	灰白	
108	005-03	須恵器	杯G蓋	南区	玄門 P 7 - 1	完形	10.4		3.5	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	灰	
109	005-01	須恵器	杯G蓋	南区	玄門 P 5 - 1	完形	14.6		3.4	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナズリ	灰	
110	007-03	須恵器	椀	南区	玄門 P 1 0	口縁部 8/12	10.4		5.2	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰白	
111	006-02	須恵器	杯G身	南区	玄門 P 5 - 2	口縁部 11/12	8.0		3.3	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰白	

第5表 土器観察表②

NO	実測番号	種類	器種	地区	遺構層位	部位残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高			
112	008-07	須恵器	杯G身	南区	玄門 P 1 5	口縁部 7/12	10.3		3.7	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ	灰	
113	007-02	須恵器	杯G身	南区	玄門 P 6 - 2	口縁部 11/12	10.0		3.3	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ?	灰	ヘラ記号
114	007-05	土師器	杯	南区	玄門 P 1 1	口縁部 8/12	12.0		3.6	内：ナテ 外：ナテ・ヘラ削り	橙	表面摩滅
115	027-01	須恵器	高杯	南区	玄門 P 1 3 - 2	口縁部 4/12	8.2	6.0	5.8	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ	灰	
116	003-01	須恵器	長頸壺	南区	玄門 P 7 - 2	口縁部 3/12	6.8		17.2	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ	灰白	
117	013-06	須恵器	杯H蓋	南区	羨道 P 2	口縁部 7/12	12.9		4.2	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	
118	004-02	須恵器	杯H身	南区	羨道 P 1 - 2	口縁部 8/12	11.4		3.5	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰白	
119	016-01	須恵器	杯G蓋	南区	玄門 P 6	口縁部 11/12	10.8		3.8	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ	灰	
120	015-04	須恵器	杯G身	南区	玄門 P 4	口縁部 11/12	9.6		3.4	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	ヘラ記号
121	016-06	須恵器	高杯	南区	羨道 P 3	口縁部 10/12	10.0	7.6	6.8	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ	灰	
122	015-03	須恵器	蓋	南区	羨道 P 3	小片				内：ロコナテ 外：ロコナテ	赤灰	
123	016-05	須恵器	高杯	南区	羨道 P 3	口縁部 2/12	12.8			内：ロコナテ 外：ロコナテ・沈線	暗赤灰	
124	002-01	須恵器	脚付長頸壺	南区	羨道 P 1 - 1	底部 9/12		9.0		内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ、刺突文	灰白	
125	012-05	須恵器	杯H蓋	南区	玄室 排水溝	口縁部 5/12	13.2		3.8	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	
126	007-01	須恵器	杯H蓋	南区	玄門 排水溝	口縁部 2/12	13.4		4.1	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	褐灰	
127	017-03	須恵器	杯H蓋	南区	羨道 流土	口縁部 1/12	12.4		3.8	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	淡黄	表面摩滅
128	012-04	須恵器	杯H蓋	南区	玄室 排水溝	口縁部 1/12	12.9		4.1	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	
129	013-07	須恵器	杯H蓋	南区	玄室 A 7・流土	口縁部 4/12	13.0		3.5	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	
130	019-04	須恵器	杯H蓋	南区	玄室 C 2・流土	口縁部 8/12	11.5		3.8	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰白	
131	021-01	須恵器	杯H蓋	南区	玄室 排水溝	口縁部 2/12	13.0			内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ	青灰	
132	018-04	須恵器	杯H蓋	南区	羨道 流土	口縁部 6/12	12.3		3.5	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	
133	016-02	須恵器	杯H蓋	南区	羨道 流土	口縁部 9/12	10.8		2.9	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	
134	006-04	須恵器	杯H蓋	南区	玄門 排水溝	口縁部 2/12	13.8			内：ロコナテ 外：ロコナテ	灰	
135	014-03	須恵器	杯H蓋	南区	羨道 流土	小片				内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰白	
136	012-06	須恵器	杯H蓋	南区	玄室 排水溝	口縁部 3/12	13.2		4.0	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ	灰白	ヘラ記号
137	021-03	須恵器	杯H蓋	南区	玄室 排水溝	口縁部 7/12	12.2		3.3	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ	紫灰	ヘラ記号
138	006-05	須恵器	杯H蓋	南区	玄門 排水溝	口縁部 4/12	13.0		3.5	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ	灰	ヘラ記号
139	017-02	須恵器	杯H蓋	南区	羨道 流土	小片				内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰白	
140	007-04	須恵器	杯H身	南区	玄門 排水溝	口縁部 4/12	11.5		3.5	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	
141	012-03	須恵器	杯H身	南区	玄室 排水溝	口縁部 2/12	12.0		4.1	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	
142	012-02	須恵器	杯H身	南区	玄室 排水溝	口縁部 2/12	12.6		3.7	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ	紫灰	
143	019-01	須恵器	杯H身	南区	玄室 C 1・流土	口縁部 4/12	12.2		3.9	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰白	
144	012-01	須恵器	杯H身	南区	玄室 排水溝	口縁部 5/12	11.9		4.1	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ	青灰	
145	017-06	須恵器	杯H身	南区	羨道 排水溝	口縁部 1/12	11.7			内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ・ヘラ切り	灰白	
146	009-05	須恵器	杯H身	南区	玄室 C 8・石敷下	口縁部 9/12	12.6		3.9	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ・ヘラ切り	灰	
147	021-02	須恵器	杯H身	南区	玄室 排水溝	口縁部 4/12	12.2		3.9	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ・ヘラ切り	灰	
148	019-03	須恵器	杯H身	南区	玄室 C 9・流土	口縁部 3/12	11.3		4.2	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰白	
149	028-08	須恵器	杯H身	南区	玄室 C 9・流土	口縁部 5/12	11.3		3.5	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	
150	020-02	須恵器	杯H身	南区	玄室 石敷下	口縁部 7/12	11.3		3.5	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ヘラ切り	灰	
151	021-05	須恵器	杯H身	南区	玄室 流土	口縁部 6/12	10.8		3.1	内：ロコナテ 外：ロコナテ・ロコナスリ・ヘラ切り	灰白	

第6表 土器観察表③

No	実測番号	種類	器種	地区	遺構層位	部位残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高			
152	021-06	須恵器	杯H身	南区	玄室 C2・流土	口縁部 6/12	10.1		3.0	内：ロコナデ 外：ロコナデ・ロコナズリ・ヘラ切り	灰	
153	017-01	須恵器	杯H身	南区	羨道 流土	口縁部 11/12	10.8		3.5	内：ロコナデ 外：ロコナデ・ロコナズリ・ヘラ切り	灰白	
154	016-03	須恵器	杯H身	南区	羨道 流土	口縁部 6/12	10.3		3.2	内：ロコナデ 外：ロコナデ・ヘラ切り	灰白	
155	009-03	須恵器	杯H身	南区	前庭 流土	口縁部 1/12	10.0		3.3	内：ロコナデ 外：ロコナデ・ヘラ切り	灰	
156	008-01	須恵器	杯H身	南区	玄室 排水溝	口縁部 2/12	12.0			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰白	
157	019-02	須恵器	杯H身	南区	玄室 C1・流土	小片				内：ロコナデ 外：ロコナデ・ヘラ切り	灰白	表面摩滅
158	008-02	須恵器	杯H身	南区	玄室 排水溝	口縁部 3/12	12.0			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰白	
159	023-02	須恵器	杯H身	南区	玄室 流土	口縁部 12/12	10.7		3.6	内：ロコナデ 外：ロコナデ・ヘラ切り	灰白	焼き歪み、自然釉
160	014-04	須恵器	杯H身	南区	玄室 排水溝	口縁部 1/12	11.8			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰白	
161	023-04	須恵器	杯H身	南区	玄室 流土	小片				内：ロコナデ 外：ロコナデ・ヘラ切り	灰白	
162	020-03	須恵器	杯H身	南区	羨道 流土	口縁部 1/12	12.8			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰白	
163	020-04	須恵器	杯H身	南区	羨道 流土	口縁部 2/12	14.0			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰	
164	008-04	須恵器	杯H身	南区	玄室 排水溝	口縁部 1/12	11.0			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰	
165	008-03	須恵器	杯H身	南区	玄室 排水溝	口縁部 2/12	10.9			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰	
166	019-05	須恵器	杯H身	南区	羨道 流土	口縁部 1/12	11.2			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰白	表面摩滅
167	014-05	須恵器	杯H身	南区	玄室 排水溝	口縁部 2/12	11.4			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰白	
168	014-01	須恵器	杯G蓋	南区	玄室 排水溝	口縁部 4/12	9.6		3.3	内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰	
169	008-05	須恵器	杯G蓋	南区	玄室 排水溝	口縁部 1/12	10.8			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰	
170	021-04	須恵器	杯G蓋	南区	玄室 排水溝	口縁部 11/12	7.7			内：ロコナデ 外：ロコナデ・ロコナズリ	灰白	重焼痕跡
171	014-02	須恵器	杯G蓋	南区	羨道 流土	完形	9.9		3.5	内：ロコナデ 外：ロコナデ・ロコナズリ	灰白	
172	018-05	須恵器	椀	南区	羨道 流土	口縁部 7/12	10.1		5	内：ロコナデ 外：ロコナデ・ロコナズリ・ヘラ切り	灰白	
173	015-02	須恵器	椀	南区	羨道 流土	口縁部 9/12	12.1		6.3	内：ロコナデ 外：ロコナデ・ヘラ切り	灰白	
174	013-05	須恵器	杯G身	南区	羨道 流土	口縁部 8/12	10.6		3.7	内：ロコナデ 外：ロコナデ・ロコナズリ	灰	
175	021-08	須恵器	杯G身	南区	玄室 流土	口縁部 7/12	10.2		3.6	内：ロコナデ 外：ロコナデ・ロコナズリ	灰	
176	004-05	須恵器	高杯か	南区	玄室 C1・流土	口縁部 3/12				内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰	
177	020-01	須恵器	高杯	南区	羨道 流土	口縁部 4/12	13.0			内：ロコナデ 外：ロコナデ・ロコナズリ	暗灰	
178	017-05	須恵器	高杯	南区	羨道 流土	小片				内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰	二段三方向ｽﾗﾝ
179	008-06	須恵器	無蓋高杯	南区	玄門 排水溝	口縁部 3/12	11.4			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰	
180	018-03	須恵器	無蓋高杯	南区	羨道 排水溝	口縁部 2/12 脚部 3/12	11.1	9.2	10.7	内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰	二段二方向ｽﾗﾝ
181	013-03	須恵器	長頸壺	南区	羨道 流土	口縁部 1/12	7.0			内：ロコナデ 外：ロコナデ・沈線	灰	自然釉
182	016-04	須恵器	壺	南区	羨道 流土	口縁部 4/12	9.2			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰白	
183	013-04	須恵器	壺か	南区	羨道 流土	口縁部 5/12	5.8			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰	
184	018-02	須恵器	脚付長頸壺	南区	羨道 排水溝	脚部 4/12		7.0		内：ロコナデ 外：ロコナデ・ロコナズリ・刺突文	灰	二段三方向ｽﾗﾝ
185	013-02	須恵器	長頸壺	南区	羨道 流土	口縁部 4/12	7.8			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰白	
186	002-02	須恵器	脚付長頸壺	南区	前庭 流土	頸～体部				内：ロコナデ 外：ロコナデ、ロコナズリ、波状文	灰白	焼成後穿孔（2箇所）
187	017-04	須恵器	脚付壺か	南区	羨道 流土	脚部 3/12	12.0			内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰白	
188	018-01	須恵器	壺か	南区	羨道 排水溝	脚部 5/15		11.5		内：ロコナデ 外：ロコナデ	灰	
189	014-06	須恵器	壺	南区	羨道 流土	小片				内：ロコナデ 外：ロコナデ・ロコナズリ	灰	

第7表 土器観察表④

NO	実測 番号	種類	器種	地区	遺構 層位	部位 残存度	法量 (cm)			技法・文様の特徴 施釉	色調 (外面)	特記事項
							口径	底径	器高			
190	013-01	須恵器	瓶類	南区	羨道 流土	口縁部 5/12	7.8			内：ロクサテ 外：ロクサテ・沈線	灰	
191	003-02	須恵器	平瓶	南区	羨道 流土	口縁部 6/12	6.2		12.3	内：ロクサテ 外：ロクサテ、ロクサスリ	灰白	
192	029-01	須恵器	甕	東区	SD3上層 (流土)	小片				内：ロクサテ・青海波文 外：ロクサテ・波状文	灰	
193	001-01	須恵器	甕	東区	流土	頸部 1/12				内：ロクサテ、 外：ロクサテ、タテ、波状文	灰	
194	004-04	須恵器	甕か	南区	表土	小片				内：ロクサテ 外：ロクサテ、波状紋	暗灰	
195	009-04	須恵器	脚付長頸壺 か	西区	表土	口縁部 1/12		13.0		内：ロクサテ 外：ロクサテ	灰	
196	006-01	須恵器	脚付長頸壺 か	南区	表土	脚部 1/12		17.8		内：ロクサテ 外：ロクサテ	灰	
197	004-01	信楽系 陶器	鉢	東区	表土	口縁部 1/12				内：ロクサテ 外：ロクサテ、施釉	素地：浅黄橙 釉色：黒褐	
198	030-01	信楽系 陶器	鉢	東区	表土	口縁部 1/12	41.6	24.8	12.2	内：ロクサテ、施釉 外：ロクサテ、ロクサスリ、施釉	素地：浅黄橙 釉色：灰白	
199	030-03	信楽系 陶器	灯明皿	東区	表土	口縁部 3/12	5.1	3	1.6	内：ロクサテ、施釉 外：ロクサテ、ロクサスリ	素地：灰白 釉色：灰白	
200	030-2	陶器	椀	東区	表土	底部 4/12		4.8		内：ロクサテ、施釉 外：ロクサテ、施釉	素地：灰白 釉色：暗赤灰	瀬戸・美濃系か
201	030-4	磁器	仏飯器	西区	表土	口縁部 2/12	5.8			内：ロクサテ、施釉 外：ロクサテ、施釉	素地：灰白 釉色：灰白	瀬戸・美濃系か

V 自然科学分析

1 分析の概要

石谷1号墳では、出土金属製品を対象に自然科学分析を行った。分析の手順としては、発掘調査終了後に三重県総合博物館にて出土金属製品の蛍光X線定点分析を実施し¹⁾、この結果を基に保存処理方針を決定した。非鉄金属が確認できた試料については、保存処理の際に株式会社吉田生物研究所にて成分分析調査を行った。(樋口)

2 金属製品成分分析調査

(1) はじめに

三重県に所在する石谷1号墳から出土した金属製品5点について、その材質を明らかにする為に以下の通り成分分析を行った。その結果を報告する。

(2) 資料

調査した資料は第8表に示す金属製品5点である。

(3) 方法

資料のX線画像を参考に各々の箔が残存していると思われる部分と地金部分の蛍光X線分析の定点分析を行い、元素を同定した。併せて資料の表裏について元素マッピングを行った。装置はAMETEK製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置SPECTROMIDEX04を用いた。

(4) 分析結果

定点分析 成分分析結果を第8表とスペクトル図(第16～25図)に示すが、その数値はあくまで参考にすぎない。結果からNo.1,2の杏葉は鉄(Fe)と錫(Sn)が、No.11,13の辻金具は鉄(Fe)が、No.12の耳環は箔部分で銀(Ag)、金(Au)、水銀(Hg)が、地金部分で鉄(Fe)と銅(Cu)が検出されている。

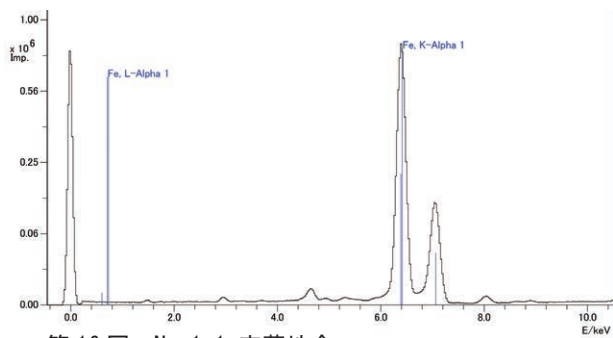
第8表 分析資料一覧

分析番号	取上番号	報告番号	出土遺構	品名	概要
1	F1	14	石谷1号墳・玄室	杏葉	土錆に覆われている。一部に箔が確認できる
2	F2	15	石谷1号墳・玄室	杏葉	土錆に覆われている。一部に箔が確認できる
11	F14	16	石谷1号墳・玄室	辻金具	土錆に覆われている。
13	F17	17	石谷1号墳・玄室	辻金具か	土錆に覆われている。
12	F15	20	石谷1号墳・玄室	耳環	ほぼ完形。一部に緑青が見られる

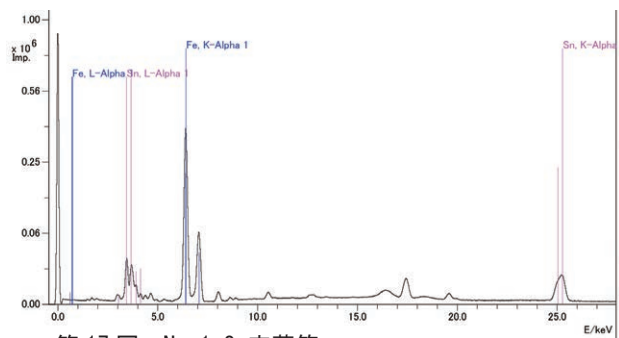
第9表 EDX結果一覧

元素	No. 1-1 (wt%)	No. 1-2 (wt%)	No. 2-1 (wt%)	No. 2-2 (wt%)	No. 11-1 (wt%)
Fe	98.15	77.02	97.69	75.56	97.65
Cu	-	-	-	-	-
Ag	-	-	-	-	-
Sn	-	19.93	-	21.66	-
Au	-	-	-	-	-
Hg	-	-	-	-	-

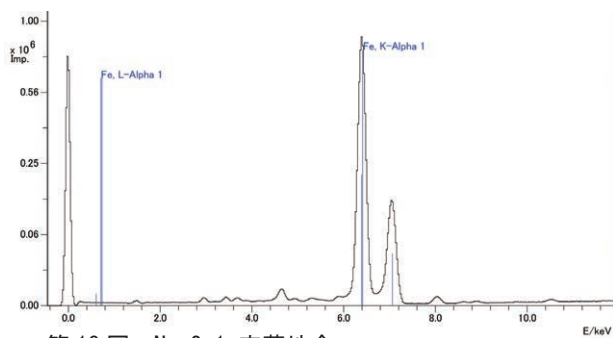
元素	No. 11-2 (wt%)	No. 12-1 (wt%)	No. 12-2 (wt%)	No. 13-1 (wt%)	No. 13-2 (wt%)
Fe	97.97	1.13	-	98.14	98.05
Cu	-	82.87	-	-	-
Ag	-	-	76.86	-	-
Sn	-	-	-	-	-
Au	-	-	12.09	-	-
Hg	-	-	8.31	-	-



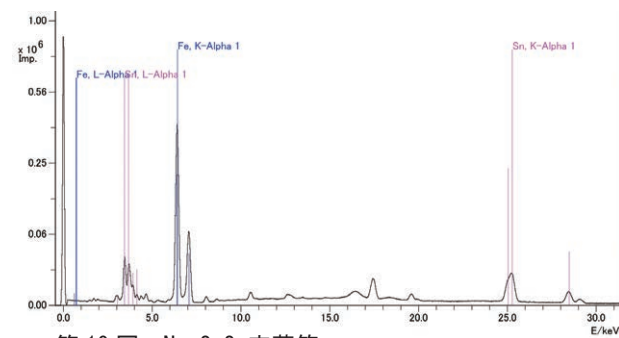
第 16 图 No. 1-1 杏葉地金



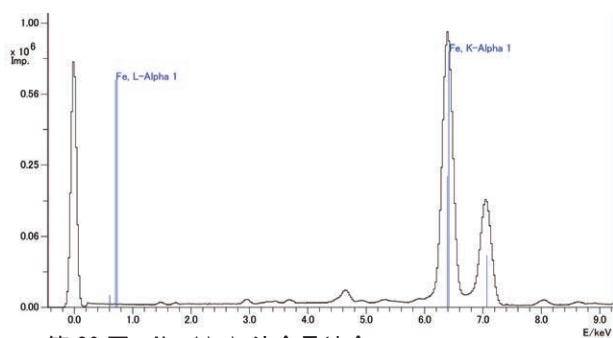
第 17 图 No. 1-2 杏葉箔



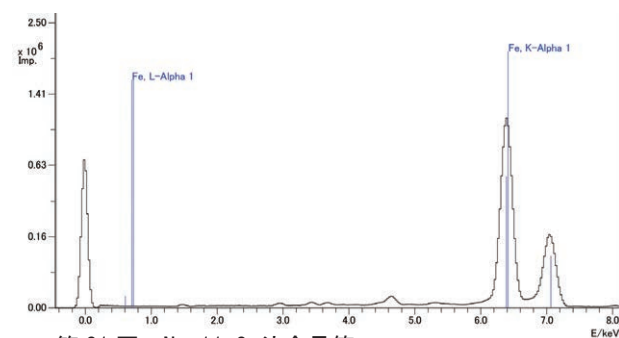
第 18 图 No. 2-1 杏葉地金



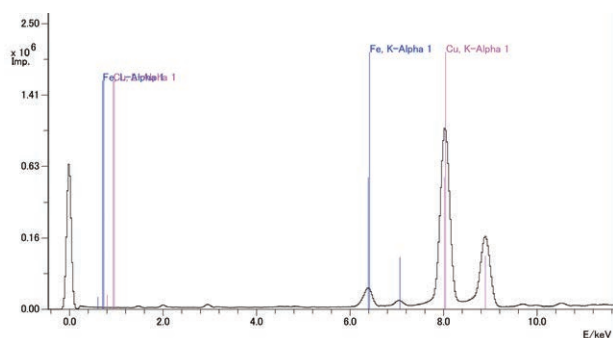
第 19 图 No. 2-2 杏葉箔



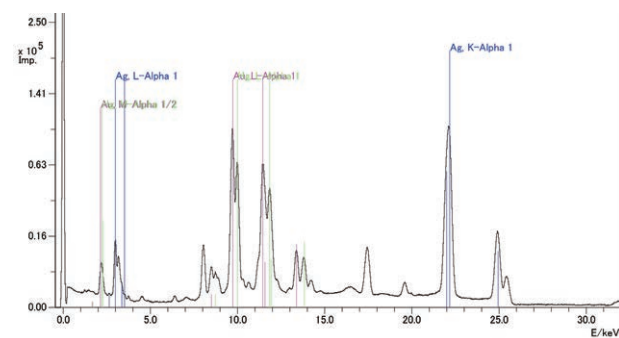
第 20 图 No. 11-1 过渡金属地金



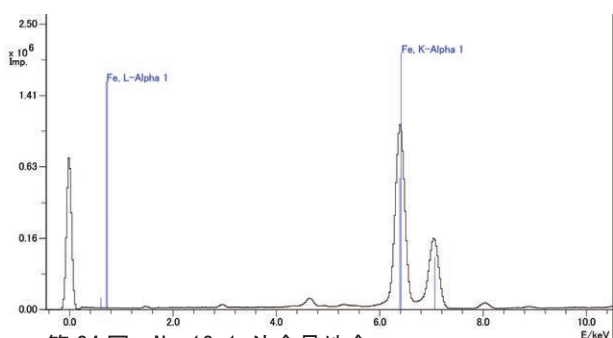
第 21 图 No. 11-2 过渡金属箔



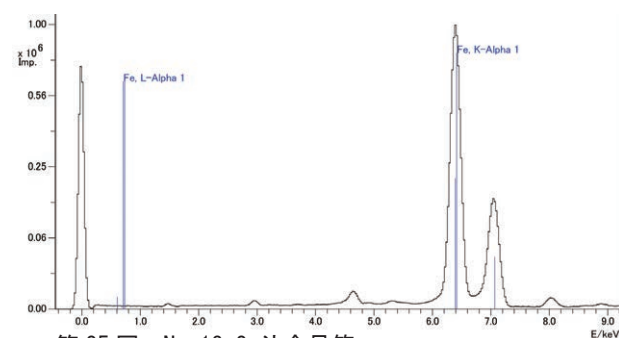
第 22 图 No. 12-1 耳環地金



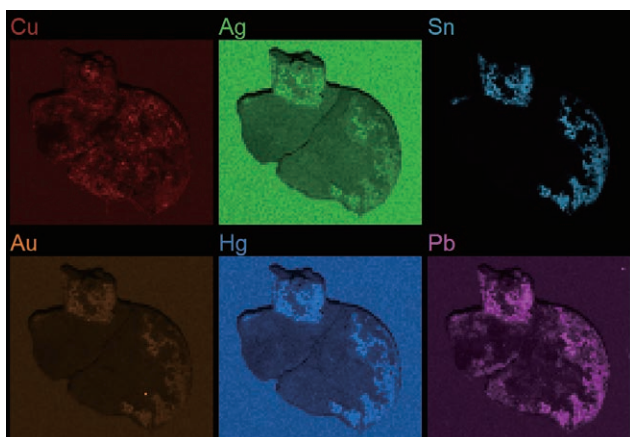
第 23 图 No. 12-2 耳環箔



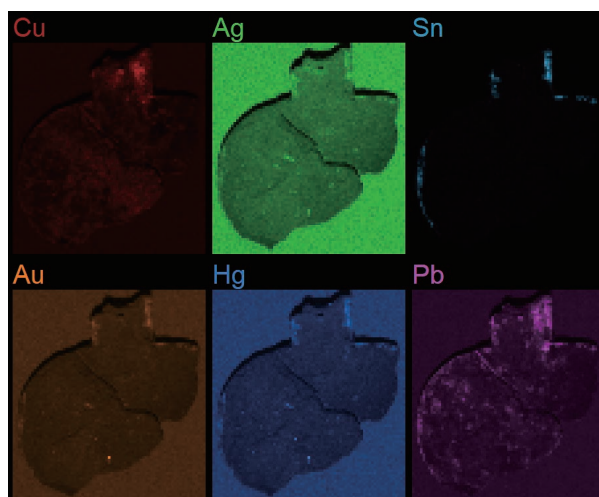
第 24 图 No. 13-1 过渡金属地金



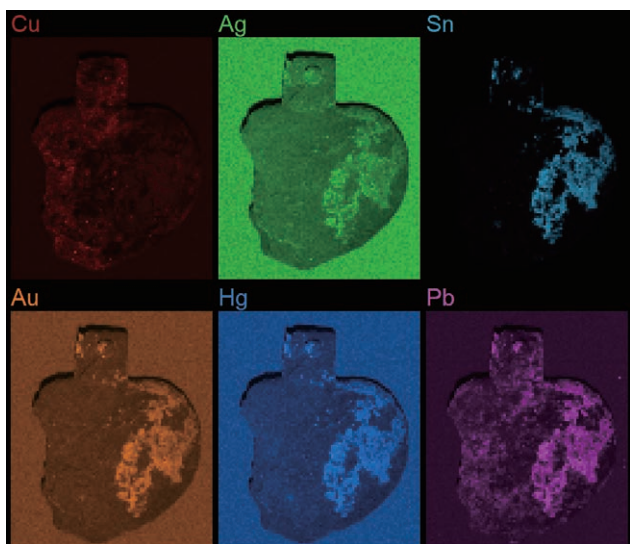
第 25 图 No. 13-2 过渡金属箔



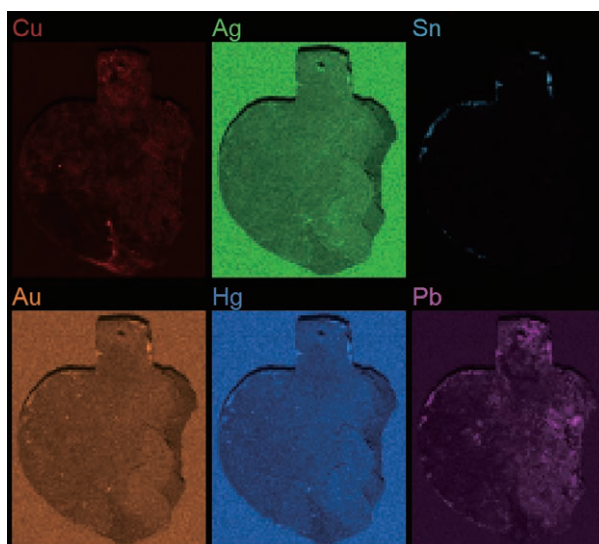
第 26 図 No. 1 杏葉表



第 27 図 No. 1 杏葉裏



第 28 図 No. 2 杏葉表



第 29 図 No. 2 杏葉裏

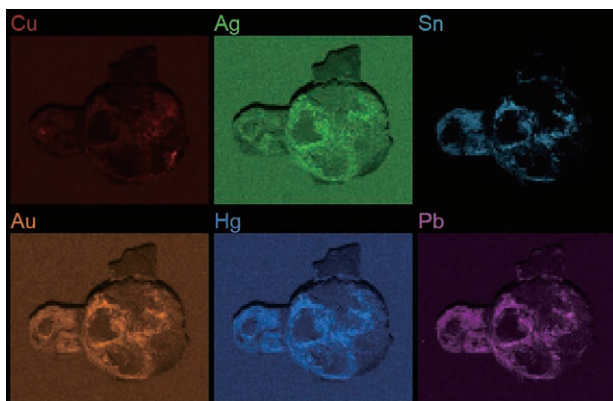
元素マッピング 定点分析の結果から、指示のあった鉄 (Fe) を除いた銅 (Cu)、銀 (Ag)、錫 (Sn)、金 (Au)、水銀 (Hg)、鉛 (Pb) の 6 元素について元素マッピングを行った。以下にマッピング画像 (第 26 ~ 35 図) を示す。

再定点分析 元素マッピングの結果から、No. 1 杏葉表、No. 2 杏葉表、No.11 辻金具裏に残存している錫箔と考えられる錫 (Sn) のマッピング図中に、指図された定点 2 ヶ所 (第 36 図) で蛍光 X 線分析を再度

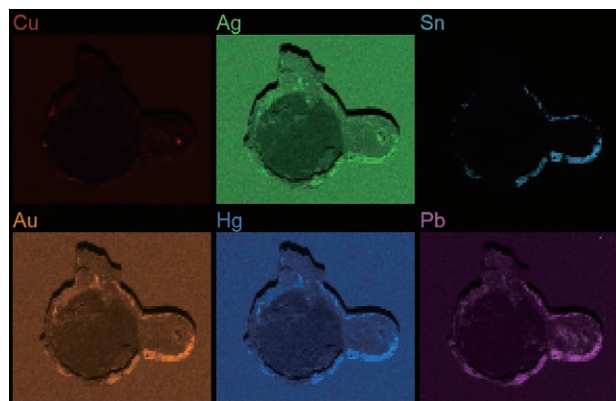
行った。以下に定点結果表 (第 10 表) とスペクトル図 (第 37 ~ 42 図) を示す。

(5) 概要

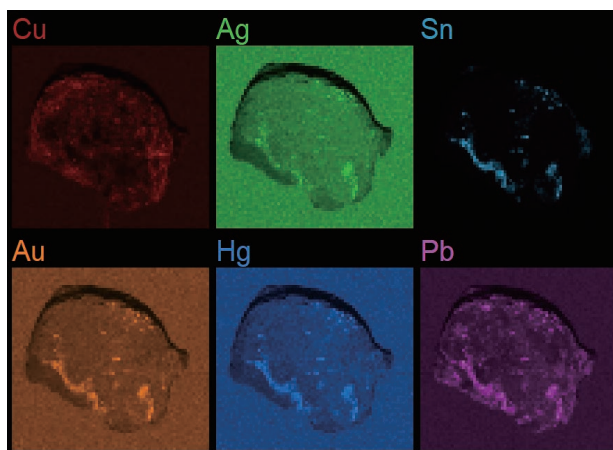
分析結果から、No. 1, 2 の杏葉と No.11,13 の辻金具は、鉄地に錫箔を巻いたもので、No.12 の耳環は、銅地に銀板を巻いて金鍍金を施したものと推察される。
(株式会社 吉田生物研究所)



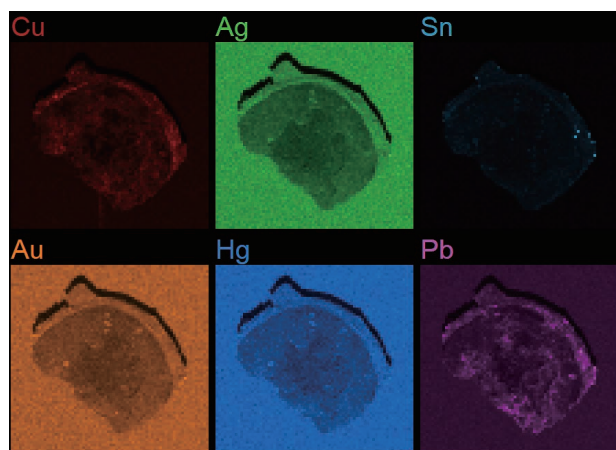
第 30 图 No. 11 迁金具表



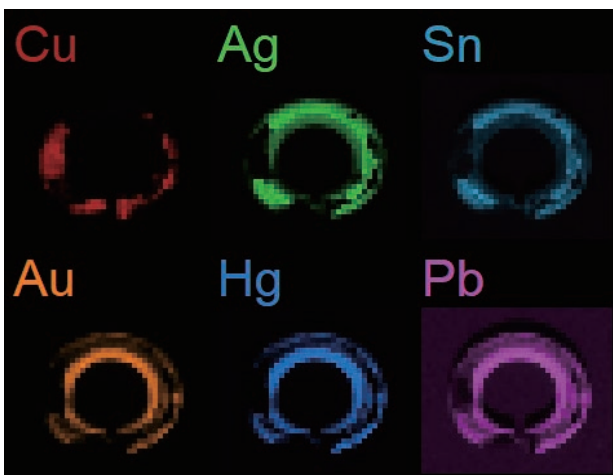
第 31 图 No. 11 迁金具裏



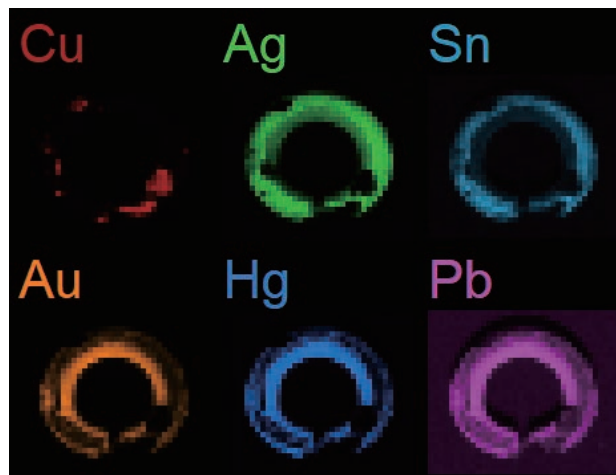
第 32 图 No. 13 迁金具表



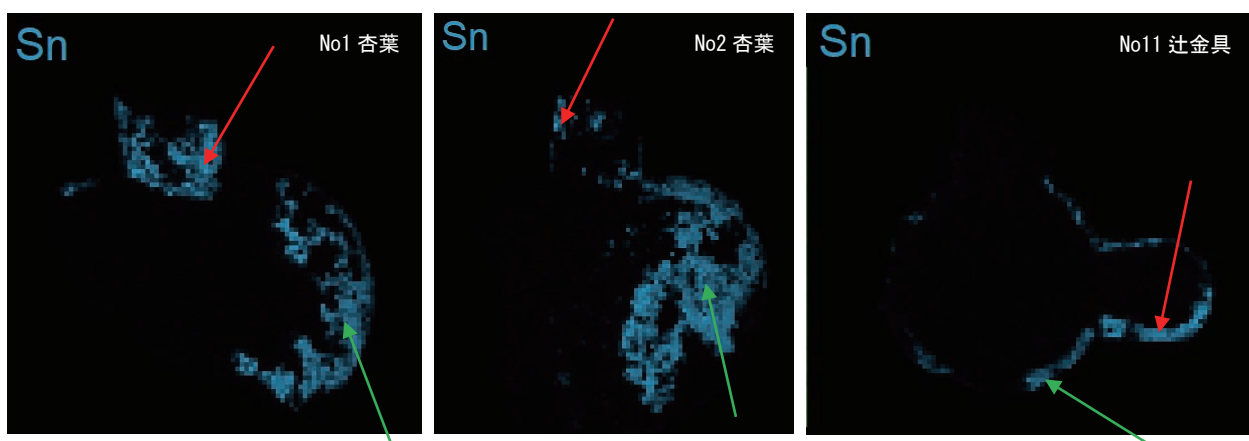
第 33 图 No. 13 迁金具裏



第 34 图 No. 12 耳環表



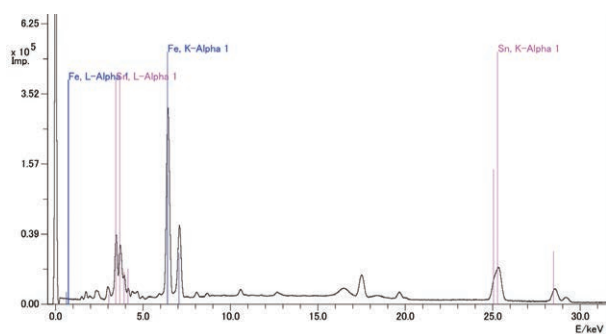
第 35 图 No. 12 耳環裏



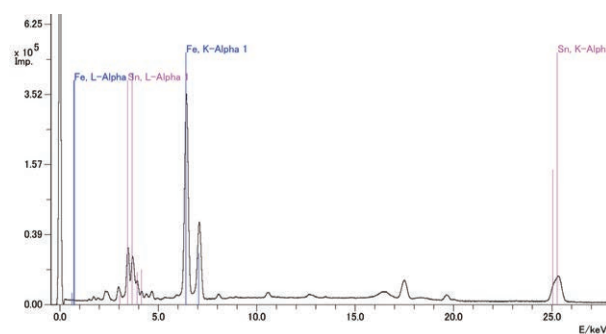
第36図 再定点分析箇所 (1→, 2→)

第10表 再定点分析結果一覽

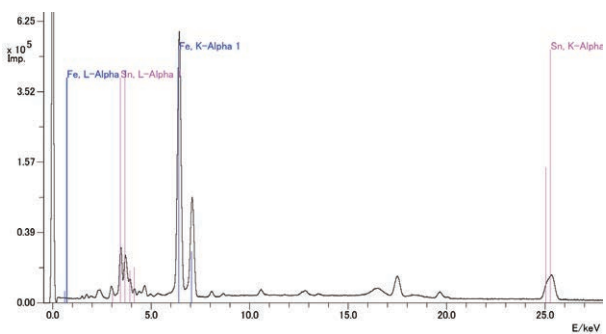
元素	No. 1表-1 (wt%)	No. 1表-2 (wt%)	No. 2表-1 (wt%)
Fe	50.03	74.09	81.54
Sn	32.75	23.90	16.21
元素	No. 2表-2 (wt%)	No. 11裏-1 (wt%)	No. 11裏-2 (wt%)
Fe	33.31	73.23	40.15
Sn	49.84	24.19	43.74



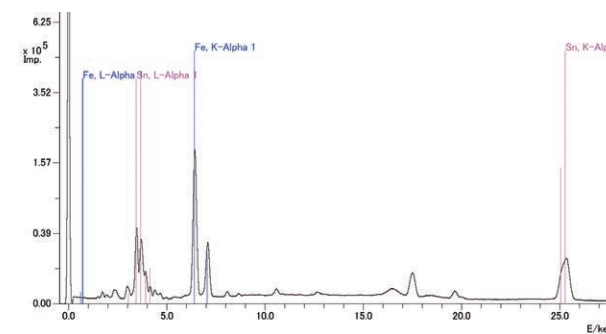
第37図 No. 1-1 杏葉



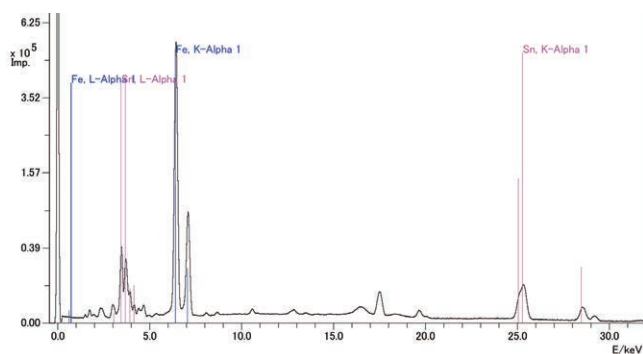
第38図 No. 1-2 杏葉



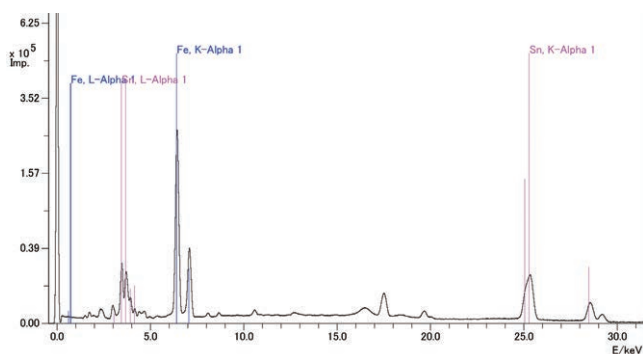
第39図 No. 2-1 杏葉



第40図 No. 2-2 杏葉



第 41 図 No. 11-1 辻金具



第 42 図 No. 11-2 辻金具

3 構造の検討

馬具 元素マッピングの結果より、No. 1, 2, 11, 13 では鉄地に錫板を張っていることが判明した。表面には錫が面的に分布する一方で、裏面には外縁部のみ分布がみられた。X線写真では立聞以外では鋳が確認できないことから、錫の薄板ないしは箔を鉄製の地金の縁に巻き付けるように張り、膠や漆などを用い固定していることが推測できる²⁾。

耳環 元素マッピングにより、緑青が噴いている破断面からは銅、肉眼で銀色を呈する範囲からは銀と錫、金色を呈する環の内側からは水銀と金がそれぞれ検出された。芯材には銅を用い、その上から銀と錫からなる薄板ないしは箔を巻いた後、水銀を用いて鍍金したものと思われる。(樋口)

註

- 1) 三重県総合博物館の甲斐由香里氏にご協力をいただいた。
- 2) 京都府立大学の諫早直人氏にご教示をいただいた。

VI 総括

1 古墳の時期的位置づけ

(1) 石室

石谷1号墳では、玄室平面形が縦長の長方形を呈する右片袖の横穴式石室を採用し、大きくは畿内系横穴式石室に分類される¹⁾。畿内型横穴式石室の編年を参照すると²⁾、石谷1号墳の袖部では大型の基底石を長軸方向に立てて配置し、奥壁基底石には比較的大型の石材を用いる。石材の大型化傾向が読み取れ、6世紀後半以降に位置づけられる。

(2) 副葬品

今回の調査では初葬時や追葬に伴う片付け後の原位置を保つと思われる遺物群を確認した。以下では各群の時期的位置づけを中心に検討する。

A～D群 玄室床面の北半から出土した遺物群で、須恵器は杯Hを中心に構成され、杯Gを含まない。杯Hの蓋口径は13.5cm、身口径は11～12cm前後を測り、頂部や底部の最終調整はロクロケズリのものでヘラ切り無調整のものが混在する。外面調整の省力化が一部進んでいる一方で、小口径化は大きくは進まず、6世紀末～7世紀初頭（TK 209型式期～飛鳥I期）に位置づけられる。

また、B・C群で出土した馬具の形態からも副葬時期の検討が可能である。心葉形杏葉は立聞孔を持たず、立聞の突起に鋏を直接打ち付けて革帯を留める構造（無鉤系列）³⁾を採用し、杏葉・辻金具ともに鋏数の省略傾向が著しい。これらの特徴からTK 209型式期～飛鳥I期に位置づけられ、須恵器の年代観とは矛盾しない。

なお、初葬に伴う棺配置は不明瞭で、敷石上から石棺材や木棺に伴う釘等は確認できなかった。ただし、玄室床面中央部には全長1mを超える大型の板石が敷かれ、近隣の辻堂古墳のような組合式石棺を設置していた可能性が高い。A～D群はこの棺を取り囲むように配置され、初葬に伴う可能性がある。

E群 玄室床面の南半で検出された遺物群で、須恵器は杯H・杯Gが混在している。杯H身の口径は11～12cm前後で、その多くは底部をヘラ切りした後調整を施さない。杯Gの蓋は突起状のつまみを有

し、口径は10cm前後と小型である。また、須恵器碗が組成に加わる。以上より当遺物群を7世紀前葉（飛鳥I期）に位置づける。

E群内のD8グリッドからは耳環や土玉がまとめて出土し、この付近に被葬者の頭部があったことが推察できる。玄室中央の組合式石棺の他に、少なくとも1体の人体埋納があったことが窺える。

F群 玄門床面から検出された遺物群で、須恵器は杯Hを僅かに含むものの、杯Gが多く、碗を含む。杯Hは口径10～11cm前後と小口径化が進み、ヘラ切り後調整を施さない個体のみから構成される。杯G蓋のつまみは、突起状のものと扁平なものの両者がみられ、やや新相を示す遺物も含む。以上よりこの遺物群は7世紀中葉（飛鳥II期）を中心に位置づけられる。

埋土・流土 古相を示す杯HはA～C群を構成する須恵器と概ね並行する年代観を示し、2段2方向スカシを有する高杯の存在からもTK 209型式期よりも遡る可能性は低い。スリット状のスカシを持つ高杯やスカシを持たない高杯も含まれ、これらはD～F群の遺物群に概ね並行する。全体として、流土出土の須恵器も6世紀末～7世紀中葉（TK 209型式期～飛鳥II期）を中心に位置づけられる。

初葬の時期 A～D群で出土した馬具や須恵器の編年の位置づけから、石谷1号墳における初葬の時期は6世紀末～7世紀初頭を想定する。ただし、石室の編年観からするとやや新しい印象を受けるため、この点については次節で検討を行う。

追葬の時期 出土須恵器の時期幅や棺配置の復元から、少なくとも1回の追葬は確実に視できる。E群が追葬に伴うものと考えた場合、追葬時期は7世紀前葉を中心に位置づけられる。ただし、7世紀中葉の須恵器が集中する玄門床面のF群については、出土状況から最終閉塞以降に行われた何らかの行為に伴う土器群の可能性もある。玄室内からは埋土を含めて飛鳥II期に位置づけられる遺物は僅かであり、この時期に羨道のみを利用する形で古墳を再利用したものと思われる。

2 横穴式石室の位置づけ

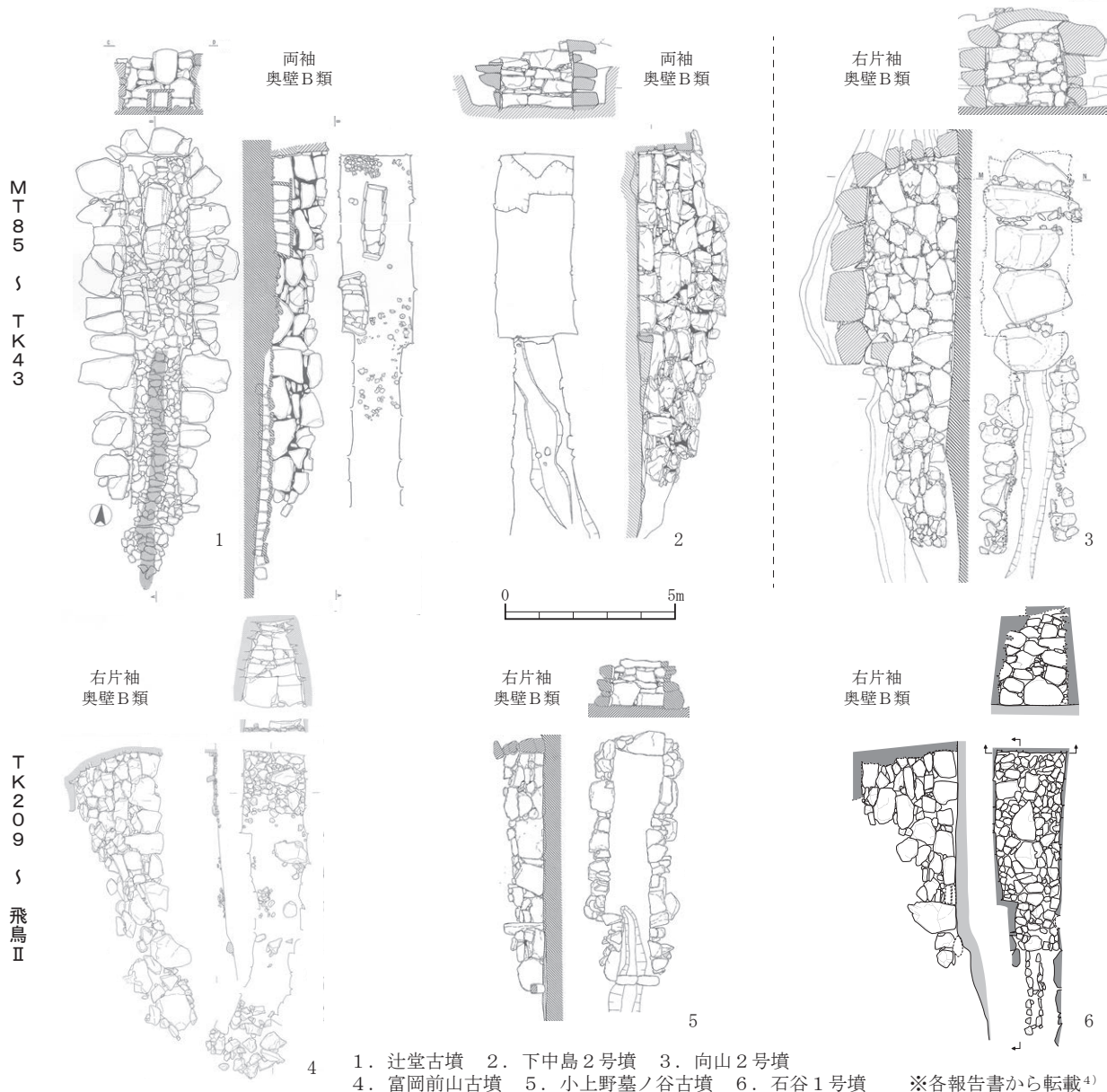
(1) 特徴の整理

本節では石谷1号墳の横穴式石室の形態的特徴を整理し、その位置づけについて検討する。石谷1号墳の横穴式石室の特徴的な点については、第Ⅲ節の内容を踏まえて以下の5点が挙げられる。

- ①玄室の平面形は細長い右片袖式を呈する。
- ②奥壁を1段2～4石程度の石材から構成する。
- ③袖石には大型石材を長軸方向に立てる。
- ④奥壁と側壁は6段前後から構成される。
- ⑤敷石と石組みの排水溝を設置する。

(2) 地域間の比較検討

玄室平面形 以上の特徴のうち、まずは①について検討を加えたい。石谷1号墳の玄室の長幅比(全長/最大幅)は2.3、面積は9.0㎡となり、縦に長い平面形を呈する。旧山田郡域に位置する横穴式石室では、玄室長幅比2～3以内、面積10㎡前後となり(第11表)、地域全体で概ね共通することがわかる。玄室の平面形態をみると、本墳は副葬品からはTK209型式期以降の築造時期が与えられるものの、明瞭な右片袖式を採用している点が特筆すべきである。旧山田郡域内の事例をみると、6世紀末葉(TK209型式期)以降にも右片袖を採用す



1. 辻堂古墳 2. 下中島2号墳 3. 向山2号墳
4. 富岡前山古墳 5. 小上野墓ノ谷古墳 6. 石谷1号墳 ※各報告書から転載⁴⁾

第43図 旧山田郡域の横穴式石室(1:200)

第11表 伊賀・名張地域の石室一覧(古墳時代後期後葉～終末期)

旧郡名	市町村名	古墳名	時期	平面形	玄室長	玄室幅	玄室面積	玄室長幅比	奥壁分類
山田郡	伊賀市(大山田村)	下中島2号墳	MT85~TK43	両袖	5.3	2.1	11.1	2.5	C
	伊賀市(大山田村)	辻堂古墳	TK43	両袖	5.2	1.9	9.9	2.7	C
	伊賀市(大山田村)	向山6号墳	TK43	左片袖	4.8	1.6	7.7	3.0	A
	伊賀市(大山田村)	向山2号墳	TK209	右片袖	5.2	2.5	13.0	2.1	B
	伊賀市(大山田村)	小上野墓ノ谷古墳	TK209	右片袖	5.0	1.6	8.0	3.1	B
	伊賀市(大山田村)	石谷1号墳	TK209	右片袖	4.5	2.0	9.0	2.3	B
	伊賀市(大山田村)	富岡前山古墳	TK209~飛鳥I	右片袖	2.4	1.8	4.3	1.3	B
	伊賀市(大山田村)	横枕2号墳	TK209~飛鳥I	右片袖	5.7	2.0	11.4	2.9	B
	伊賀市(大山田村)	平林2号墳	TK209~飛鳥I	右片袖	5.4	2.2	12.0	2.5	C
	伊賀市(大山田村)	神林9号墳	TK209~飛鳥II	無袖?	4.4	2.1	9.1	2.1	C
阿拝郡	伊賀市(伊賀町)	菰池2号墳	TK43	無袖?	4.3	1.5	6.5	2.8	B
	伊賀市(伊賀町)	筒御前古墳	TK209	無袖	4.4	1.3	5.7	3.4	C
	伊賀市(阿山町)	浅子谷3号墳	MT85~TK43	右片袖	4.9	2.0	9.8	2.5	C
	伊賀市(阿山町)	奥弁天4号墳	TK43	右片袖	4.5	1.7	7.7	2.6	B
	伊賀市(阿山町)	上丸川1号墳	TK43	右片袖	4.0	1.9	7.4	2.2	C
	伊賀市(阿山町)	浅子谷2号墳	TK43~209	右片袖	4.5	2.3	10.4	2.0	B
	伊賀市(阿山町)	上丸川2号墳	TK209	左片袖	3.9	1.9	7.2	2.1	C
	伊賀市(阿山町)	波敷野1号墳	飛鳥I?	左片袖	6.2	2.2	13.6	2.8	A
伊賀郡	伊賀市(阿山町)	浅子谷1号墳	飛鳥II	右片袖	3.4	1.4	4.8	2.4	A
	伊賀市(青山町)	勝地大坪1号墳	TK43	右片袖	3.3	1.7	5.6	1.9	A
	伊賀市(青山町)	勝地大坪2号墳	TK209~飛鳥I	無袖	4.0	1.3	5.2	3.0	A
	伊賀市(上野市)	才良吉田谷2号墳	飛鳥I~II	両袖	2.8	1.6	4.4	1.7	B
名張郡	名張市	赤井塚古墳	TK209?	両袖	5.7	2.4	13.7	2.4	A
	名張市	尻矢4号墳	TK43	右片袖	3.3	1.5	5.0	2.2	A
	名張市	尻矢8号墳	TK43	右片袖	2.7	1.1	2.9	2.4	C
	名張市	鹿高神社1号墳	TK43	両袖	4.6	1.7	7.5	2.8	C
	名張市	石取場1号墳	TK43~TK209	無袖	3.0	1.2	3.5	2.5	C
	名張市	上山8号墳	TK43~TK209	両袖	3.5	1.5	5.3	2.3	A
	名張市	小谷3号墳	TK43~TK209	両袖	3.3	1.8	6.0	1.8	A
	名張市	小谷4号墳	TK43~TK209	無袖	2.8	1.0	2.8	2.8	A
	名張市	尻矢1号墳	TK209	両袖	4.8	2.2	10.5	2.2	A
	名張市	尻矢6号墳	TK209	右片袖	5.0	1.8	9.0	2.8	C
	名張市	丸尾山3号墳	TK209	無袖	3.4	1.2	4.2	2.7	C
	名張市	ひなご屋敷3号墳	TK209~飛鳥I	右片袖	2.8	1.4	3.8	2.1	A
	名張市	上山14号墳	飛鳥I	両袖	3.2	1.7	5.3	1.9	A
	名張市	上山7号墳	飛鳥I	両袖	3.3	1.6	5.2	2.0	A
	名張市	男山4号墳	飛鳥II~IV	無袖	2.0	0.8	1.6	2.5	C
	名張市	上山13号墳	飛鳥II~IV	両袖	2.7	1.5	4.1	1.8	A

る石室がみられ、現状では7世紀に入っても両袖式や無袖式の採用事例は僅かで、この点でも地域内で共通性がみられる。

続いて、周辺の伊賀・名張地域における同時代の概況を確認する。いずれの地域でも玄室長幅比は2.5前後になる事例がほとんどで、比較的細長い平面形を持つ玄室が採用されることは小地域の単位を超えて共通している。一方、玄室平面形には小地域間で差異が見出し得る。旧名張・伊賀郡域ではTK209型式期以降に両袖式や無袖式が増加する。また、無袖式を採用する石室では玄室長幅比2.5以上・面積5㎡前後以下になるのに対し、両袖式では長幅比2.5以下・面積5㎡以上となり、階層差として捉えうる差異が地域内でみられる。

一方、伊賀盆地北部を占める旧阿拝郡域では、調査事例が少ないものの、TK209型式期以降にも片袖系の横穴式石室が確認できる。

奥壁形態 6世紀末葉の畿内型石室では奥壁石材の1段1石積化が進行するが、石谷1号墳では最下段に幅120cmの大型石材を用いるものの、この1枚で奥壁の全幅を満たしておらず、大型石材と中型石材を組み合わせて形成している。天井石には幅2m前後の大型石材を用いることから、奥壁の全幅を満たすサイズの石材が全く入手できなかったとは考えにくく、奥壁の「1段1石積化」の意識は希薄であったと思われる。以下では、この観点から周辺地域における奥壁形態のあり方を概観したい。

はじめに、奥壁形態を大型石材利用の程度から以

下のように分類する。奥壁の全幅を満たす大型石材（幅1m前後以上）を利用するものをA類、大型石材を用いるものの奥壁の全幅を満たさず中型石材と組み合わせて構築するものをB類、奥壁に大型石材を用いないものをC類とする。

まず、旧山田郡域の状況を概観すると、TK 209型式期以降でB類の事例が多くみられる（第11表）。一定程度の大型石材利用への指向は読み取れるものの、7世紀に入っても奥壁の「1段1石積化」は進行しない地域として評価できる（第43図）。

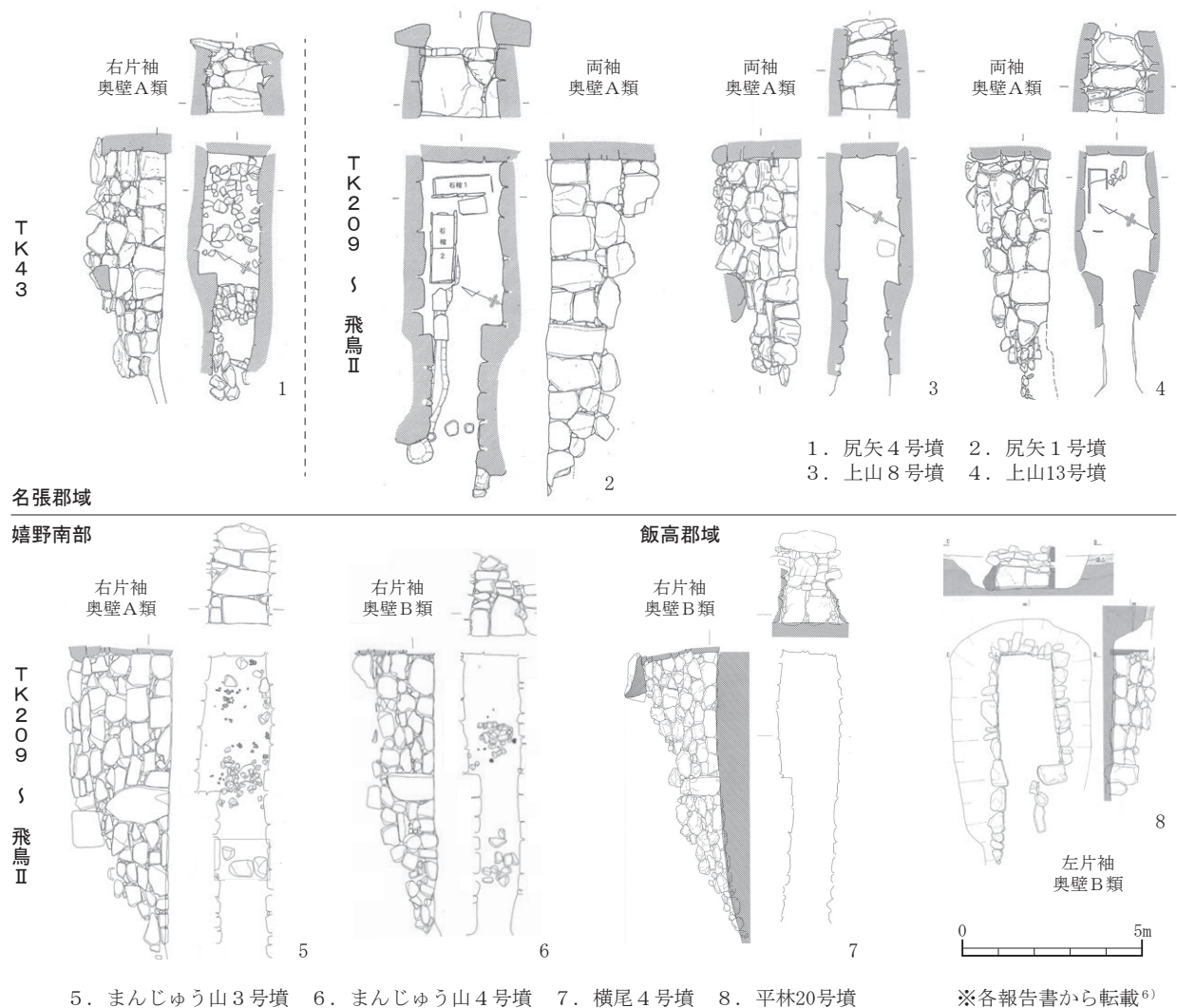
次に周辺地域の同時代資料に目を向けると、旧阿拝郡域ではA・B・C類のいずれもが確認できる。一方、旧名張郡・伊賀郡域では、両袖式の石室ではA類が採用され、無袖石室ではC類が多くみられ、B類はほとんど確認できない。

石室の系譜 6世紀末葉以降の伊賀・名張地域の横

穴式石室にみられる地域性を整理してきたが、旧名張・伊賀郡域と旧山田・阿拝郡域でおおまかに地域差がみられた。前者では両袖式と無袖式の玄室平面形が広く採用され、両袖式では奥壁に石室全幅を満たす大型石材を用いる傾向がみられた（第44図）。これらは同時代の畿内型横穴式石室でみられる特徴で、名張地域における畿内地域の影響については先行研究が示す通りである⁵⁾。

石谷1号墳を含む後者では、7世紀に入っても片袖系の石室が残り、奥壁の「1段1石積化」の進行は顕著ではない。石室構築技術における畿内地域からの同時代的な影響度は比較的低いことが想定される。ただし、このような特徴が在地で独自に発達したもののなのか、他地域からの影響を受けた結果なのかは追加の検討を要する。

中南勢地域との比較 旧山田郡域の横穴式石室に



第44図 周辺地域の横穴式石室(1:200)

第12表 周辺地域の石室一覧(古墳時代後期後葉～終末期)

旧郡名	市町村名	古墳名	時期	平面形	玄室長	玄室幅	玄室面積	玄室長幅比	奥壁石材	
一志郡	津市(一志町)	ユガミ谷1号墳	TK43?	両袖	3.7	1.7	6.3	2.2	A	
	津市(一志町)	ユガミ谷2号墳	TK43?	両袖	3.7	1.9	7.0	1.9	-	
	津市(一志町)	宮ノ下1号墳	TK43~TK209	右片袖	4.0	1.5	6.0	2.7	A	
	津市(一志町)	上井生3号墳	TK209	左片袖	3.2	1.8	5.8	1.8	B	
	津市(一志町)	丸ヶ谷A-3号墳	TK209?	両袖	4.6	2.0	9.2	2.3	A	
	津市(一志町)	薬師谷12号墳	TK209	両袖	2.6	1.3	3.4	1.9	A	
	津市(一志町)	高畑古墳	TK209~飛鳥I	無袖	3.6	1.3	4.7	2.8	A	
	津市(一志町)	下名倉3号墳	飛鳥I	両袖	3.4	1.6	5.4	2.1	A	
	津市(一志町)	下名倉4号墳	飛鳥I	両袖	3.3	1.5	5.0	2.2	B	
	津市(一志町)	上野山12号墳	飛鳥II~IV	両袖	4.2	2.0	8.4	2.1	B	
	津市(一志町)	上野山10号墳	飛鳥II~IV	両袖	4.0	1.4	5.6	2.9	A	
	津市(白山町)	ガガフタ1号墳	TK43~TK209	右片袖	4.0	2.3	8.9	1.8	B	
	津市(白山町)	ガガフタ2号墳	TK43~TK209	右片袖	4.3	2.1	9.0	2.0	B	
	松阪市(嬉野町)	天保6号墳	飛鳥I	両袖	3.2	1.4	4.5	2.3	B	
	松阪市(嬉野町)	天保7号墳	不明	無袖	2.6	0.9	2.3	2.9	C	
	松阪市(嬉野町)	まんじゅう山1号墳	TK43	右片袖	3.3	1.6	5.3	2.1	B	
	松阪市(嬉野町)	まんじゅう山5号墳	不明	右片袖	3.3	1.7	5.6	1.9	B	
	松阪市(嬉野町)	まんじゅう山2号墳	TK209	右片袖	3.3	1.5	5.0	2.2	B	
	松阪市(嬉野町)	まんじゅう山3号墳	TK209	右片袖	3.8	1.8	6.8	2.1	A	
	松阪市(嬉野町)	まんじゅう山4号墳	飛鳥I	右片袖	3.5	1.6	5.6	2.2	B	
飯高郡	松阪市	平林19号墳	TK209	右片袖	3.7	1.4	5.2	2.6	B	
	松阪市	平林20号墳	TK209	左片袖	3.0	1.6	4.8	1.9	B	
	松阪市	平林6号墳	飛鳥I	右片袖	3.0	1.8	5.4	1.7	A	
	松阪市	垣内田3号墳	TK209~飛鳥I	右片袖	3.5	1.2	4.2	2.9	B	
	松阪市	垣内田4号墳	TK209~飛鳥I	無袖	3.7	1.2	4.4	3.1	B	
	松阪市	垣内田6号墳	飛鳥I	右片袖	3.3	1.2	4.0	2.8	B	
	松阪市	白山3号墳	TK209	右片袖	4.2	1.5	6.3	2.8	C	
	松阪市	白山4号墳	TK209~飛鳥I	右片袖	4.2	1.3	5.5	3.2	B	
	松阪市	横尾4号墳	飛鳥I~II	右片袖	2.2	1.1	2.4	2.0	B	
	松阪市	横尾1号墳	飛鳥II~IV	右片袖	3.1	1.2	3.7	2.6	B	
	飯野郡	松阪市	庄古墳	TK43	右片袖	7.0	1.7	11.9	4.1	A
		松阪市	やつで3号墳	TK209	両袖	5.5	1.4	7.7	3.9	A
多気郡	多気町	上村池3号墳	不明	両袖	3.0	1.9	5.7	1.6	A	
	多気町	小金3号墳	TK43~TK209	両袖	4.3	1.4	6.0	3.1	B	
	多気町	河田B-5号墳	不明	両袖	5.0	1.6	8.0	3.1	B	
	多気町	河田B-14号墳	不明	両袖	5.0	1.5	7.5	3.3	B	
度会郡	伊勢市	高倉山古墳	TK43~TK209	両袖	9.7	3.3	32.0	2.9	B	
	南伊勢町	宮山古墳	TK209	右片袖	5.0	2.3	11.5	2.2	B	

は、6世紀後半の下中島2号墳(第43図2)のように中勢地域との関連が指摘される事例が含まれる⁷⁾。地理的な連続性と併せて、当該地域と中南勢地域との関係は考慮すべきである。

6世紀後半以降の中南勢地域における横穴式石室を第12表に示した。旧一志町域と旧多気・度会郡域では両袖式の横穴式石室が優勢であり、前者ではA類の奥壁を採用する点では名張地域との共通性がみられる。後者ではB類奥壁もみられるものの、玄室長幅比が3~4を示し、「高倉山型石室」として把握される⁸⁾。一方、旧嬉野町南部から旧飯高郡域にかけては6世紀末以降も片袖式が残る。奥壁はB類が多く、玄室長幅比は2~3以内に概ね収まり、これらの点も旧山田郡域と共通する。石谷1号墳でみられ

た③・④の属性についても検討すると、松阪市のまんじゅう山古墳群や横尾古墳群では石谷1号墳に類似する事例がみられる(第44図)。これらの玄室側壁に目を向けると、基本的には大型の石材を用いず6段前後から構成され、袖石にのみ大型石材を長軸方向に立てて配し、石谷1号墳の石室構造と類似する。

この背景については、両地域の横穴式石室に共通性がみられる事例が存在することを踏まえると、何らかの技術的な交流があったことは十分に想定できる。また、両地域とも畿内型石室が長期的に受容される地域(前者は名張地域、後者は雲出川下流域)の周縁部に位置することから、畿内地域の影響を間接的に受けつつも、在地的な交流の中で独自の石室が発達したものと思われる。

(3) 小結

6世紀末葉以降の石谷1号墳を含む旧山田郡域の横穴式石室では、名張地域などでみられるような同時期的な畿内地域からの影響は希薄である。同様の特徴は旧嬉野町南部から旧飯高郡域にかけての石室でもみられ、中南勢地域との在地的な技術交流があった可能性が考えられる。また、石谷1号墳の近隣に位置する辻堂古墳では、玄室平面形態は石谷1号墳と異なるものの、敷石・棺配置・石組排水溝などの石室内部構造では多くの共通点がみられる。地域内での技術の継承・共有も十分に想定できる。

3 副葬品の位置づけ

(1) 金属製品の位置づけ

大刀 石谷1号墳では少なくとも直刀2振りが出土した。また、直刀から外れた破片の状態、柄頭1点、釧1点、責金具1点、鏝と思われる破片数点が出土した。副葬時や追葬に伴う片付けの際に取り外されたものか、盗掘や攪乱の際に外れてしまったものかは判断できないものの、その拵えと位置付けについて以下で検討したい。

柄頭(第9図4)は破片資料ではあるものの、その断面形状から袋頭大刀の柄頭と判断した。なお、X線透過撮影と蛍光X線分析の結果、象嵌や鍍金の痕跡は検出できなかった。このような象嵌を持たない鉄製円頭柄頭は静岡・長野以東を中心に分布することが大谷宏治氏によって指摘されている⁹⁾。本例は明確に円頭大刀とは断定できないものの、類似する事例の存在には留意すべきである。

釧・責金具・鏝についても、X線透過撮影と蛍光X線分析を行ったが、いずれも象嵌や鍍金の痕跡はみられず、全体として装飾性の低い鉄製刀装具として評価できる。全体の拵えとしてはいわゆる装飾付大刀に準ずる様式に復元できる。

鉄地錫張馬具 石谷1号墳では杏葉2点・辻金具1点・雲珠1点・絞具2点が出土した。この内、杏葉・辻金具・雲珠については蛍光X線分析の結果、鉄地に錫の薄板を巻き付けていることが判明した。

鉄地錫張(装)馬具と考えられる事例は、富山県富山市の番神山B9横穴墓で出土した鉄地錫装飾金具¹⁰⁾のほか、福島県南相馬市の羽山1号墳で出土

した錫装銕を用いた帯金具¹¹⁾が挙げられる。馬具以外では鳥根県出雲市の上塩治築山古墳にて錫装銕を用いた鞞金具があるほか、錫製耳環の副葬資料が一定数確認されている。後者に着目すると、比佐陽一郎氏が鉛・錫製耳環の分布を検討しており、両者が畿内地域では出土せず、前者が中国地方周辺、後者が千葉県以北にそれぞれ偏在することを指摘している¹²⁾。畿内地域以外での偏在や特定の職掌や階層に偏らず副葬されることを踏まえ、これらの耳環について比佐氏は地方工房での製作を想定し、銀の代用品としてより融点が低く加工が容易な錫や鉛を用いた可能性に言及している。

錫装馬具について錫製耳環と同様の指摘ができるかは今後の資料の増加を待つ必要があるが、銀の代用として錫を用いた製品が東日本を中心に流通していた可能性は留意すべきである。

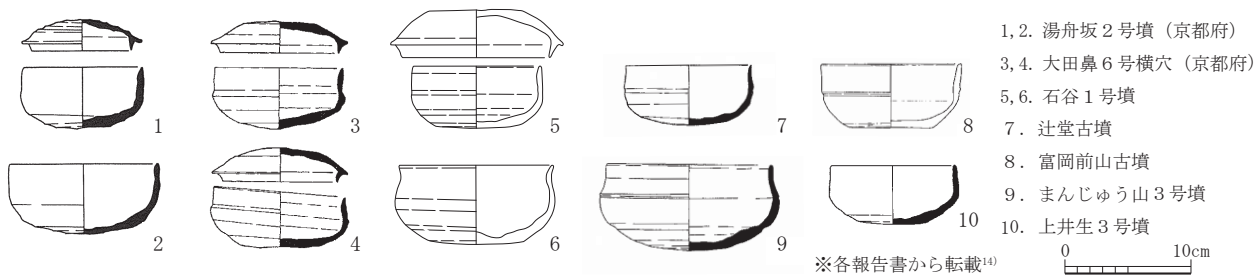
(2) 須恵器の位置づけ

杯Hの生産単位 石谷1号墳の玄室床面から出土した杯Hの口径をみると、第1節で指摘したように小口径化傾向はあまりみられない。これらの外面調整は、ロクロケズリを施す個体とヘラ切り無調整で仕上げる個体が混在することも前述の通りである。

ロクロケズリを施す個体に着目すると、外面の色調は青灰色を呈し、焼成は堅緻で、自然釉がほとんどかからない。破面の色調は青灰色のものと、暗赤灰色を呈するものの2者がみられる。一方、ヘラ切り無調整のものは、色調は灰白色ないしは灰色を呈し、生焼けのものが一定数含まれる。玄室床面から出土した杯Hでは、外面調整・色調・焼成を基に少なくとも2つの生産単位が復元できる¹³⁾。

このような差異の背景には、時期差や系統差が想定されるわけだが、A～C群では生産単位の異なる個体が隣り合って出土し、一括して副葬された可能性は考慮すべきである。片付けによる混交を完全には排除できないものの、1回の埋葬において、一括生産された杯Hをまとめて副葬しているわけではなく、複数の生産単位から入手したものを副葬していると考えるのが妥当である。

転用品 石谷1号墳で出土した須恵器の中には、本来の機能とは別の用途で使われている事例がいくつ



地域	古墳	時期	石室	備考
伊賀	辻堂古墳	TK43	両袖	
	石谷1号墳	TK209 ～飛鳥I	右片袖	鉄製無象嵌袋頭大刀 鉄地錫張心葉形杏葉
	富岡前山古墳	TK209 ～飛鳥I	右片袖	銀象嵌円頭大刀 鉄地金銅装纒形鏡板
	横枕2号墳	飛鳥I	右片袖	
名張	辻垣内5号墳	飛鳥I～II	不明	
北勢	青木川2号墳	TK209 ～飛鳥I	不明	
中勢	まんじゅう山3号墳	TK209	右片袖	ミニチュア炊飯具 釵子
	上井生3号墳	TK209 ～飛鳥I	左片袖	
	大山田A34号墳	飛鳥I	不明	
	中野山14号墳	飛鳥II～IV	不明	
	上野山12号墳	飛鳥II～IV	両袖	
南勢	宮山古墳	TK209 ～飛鳥I	右片袖	金銅装双龍環頭大刀

第45図 県内の須恵器椀副葬古墳とその分布

かみられた。まず、椀の蓋として用いた杯H身（第12図92）が玄室床面から出土している。後者の口径は前者の口径よりもやや大きく、しっかりと組み合った状態でみつかった。また、羨道土からは肩部に焼成後穿孔がみられる脚付長頸壺（第14図186）が出土した。穿孔位置から考えると、内容物の液体を注ぐための穴の可能性があり、脚付長頸壺を甕のような用途で使っていたことが想定できる。**蓋付椀** 転用品ではあるものの、石谷1号墳では蓋付の須恵器椀が副葬されることが確認された。このような蓋付椀は丹後や北但馬を中心にみられることが知られている¹⁵⁾。蓋が付くか判断できないものも含めて、県内の古墳に副葬される須恵器椀を集成した（第45図）。この分布をみると、辻堂古墳や富岡前山古墳など山田盆地東部の古墳に集中して副葬される他、雲出川流域以南の中勢地域の古墳でもまとまって確認できる。これらの地域と北近畿との直接的な交流については断定できる状況にないものの、少なくとも山田盆地と中勢地域の一部集団間に何らかの交流があったことは須恵器椀の副葬状況から推察できる。

(3) 小結

出土金属製品については、一般的な鉄地金銅装馬

具とは異なる製作背景が考えられる鉄地錫張馬具が副葬されることを取り上げた。須恵器については、複数の生産単位から入手したものが並存することや、「転用品」と思われる須恵器の存在を指摘した。北近畿と関連する可能性がある蓋付椀の副葬も確認でき、これらの分布状況から中勢地域との交流関係を想定した。いずれについても、畿内中枢部との直接的な交流の中で入手されたものというよりは、在地的な背景を反映したあり方として評価できる。

4 石谷1号墳からみた地域社会

(1) まとめ

第II章でも取り上げたように、石谷1号墳が位置する山田盆地では、6世紀以降に古墳築造が活発化する。これらの横穴式石室の玄室長は5m前後のものが多いことが指摘されており¹⁶⁾、同時期に比較的大型の石室が山田盆地内に併存することになる。石谷1号墳も当地域の中では特段卓越する石室規模を持つわけではない。

副葬品については、盗掘を免れた古墳はほとんどなく、一概に古墳同士を比較することはできないが、当地域で馬具や装飾付大刀を副葬する古墳としては、辻堂古墳、小上野墓ノ谷古墳、富岡前山古墳が知られて

いる。いずれも6世紀後葉～7世紀初頭の築造で、辻堂古墳では素環鏡板付轡・金環・ガラス玉・銅製空玉など、小上野墓ノ谷古墳では素環鏡板付轡・木芯鉄板壺鏡・鉄地金銅装飾金具・瑪瑙製勾玉などが確認されている。いずれの古墳も玄室長5mを超える横穴式石室を有し、立地も周囲の群集墳からはやや離れた舌状の丘陵端に位置し、単独墳的な性格が想定されるものの、比較的簡素な鉄製馬具が副葬されている。

一方の富岡前山古墳では鉄地金銅装の鐘形鏡板・杏葉・辻金具など2セット以上の馬具、亀甲繫鳳凰文の銀象嵌を施した円頭柄頭と鞆尻金具、金環、銀製空玉、碧玉製管玉など、優秀な副葬品を持つ。鉄地錫張馬具を副葬する石谷1号墳は、鉄製馬具のみを副葬する前者よりは優位に立つものの、本格的な金銅装馬具や装飾付大刀を副葬する後者には階層的に劣位になるという解釈も成り立つ¹⁷⁾。

ただし、石室の規模・構造に関してはこのような階層的秩序は見出しにくい。辻堂古墳、小上野墓ノ谷古墳、石谷1号墳では玄室長5m前後の比較的整った両袖式や右片袖式の石室を採用する。対して、富岡前山古墳は全長2.4mの狭小な玄室を持ち、羨道も大きく曲がり、全体として稚拙な石室構造であることが報告されている¹⁸⁾。また、奥壁構造はいずれもB類を採用し、古墳間に共通性も認められる。

このような一見矛盾する状況を、階層差の観点から全て説明することは、この地域では難しいように思う。馬具などからは階層性が窺えるものの、石室の規模や形態は地域内で共有される部分があり、同時代の旧名張郡域の石室でみられるような明確な階層構造は想定できない。また、やや特殊な性格が想定される須恵器椀についても辻堂古墳・石谷1号墳・富岡前山古墳で共通して副葬され、形態や法量も酷似している。

当該期の山田盆地では、各古墳の被葬者間で石室構築技術や、須恵器の流通や副葬に関する情報を共有しつつ、ある程度の自律性を持って政治・経済活動に従事する中で装飾付大刀や馬具などを独自に入手した、という解釈も成り立つ。石谷1号墳の石室構造や副葬品をみると、盆地内や隣接する中勢地域との在地的な交流を維持しつつ、東日本や日本海地域などの遠隔地とも何らかの関わりを持った被葬者像が復元できる。

石谷1号墳の北方1kmに位置する白鳳寺院である

鳳凰寺廃寺からは日本海地域を介して伝播した製作技法を用いた特殊な軒丸瓦が出土している¹⁹⁾。6世紀後半以降の古墳から読み取れる対外交流関係が、7世紀後半に入って築かれる白鳳寺院からも同様に認められる点は興味深い。予察的ではあるが、古墳時代から飛鳥時代へ移行する地域社会のあり方を考える一助となれば幸いである。

(2) 今後の課題

今回の発掘調査では、20基以上から成る石谷古墳群の内、1号墳1基のみの情報が得られたに過ぎず、群集墳の全容やその展開については大部分が不明である。山田盆地内でも群集墳全域あるいは支群全域を調査・報告した事例はほとんどなく、今後の調査の進展に期待したい。また、群集墳に伴う集落の展開についても今後検討が必要である。

また、出土した杏葉や辻金具などの馬具について、出土当初は簡素な鉄製馬具としたものの、蛍光X線分析を実施した結果、鉄地錫張馬具であることが判明した。このような鉄地錫張馬具の類例は現状では少ないものの、今まで鉄製馬具としていた資料の中に、錫やその他の非鉄金属から構成される資料が含まれる可能性が示唆される。一見簡素な鉄製馬具のように見える資料についても、今後は必要に応じて蛍光X線分析を実施することが有効であると考えている。

註

- 1) 土生田純之 1994「畿内型石室の成立と伝播」『ヤマト王権と交流の諸相』名著出版
- 2) 太田宏明 1999「畿内型石室の属性分析による社会組織の検討」『考古学研究』46巻1号 考古学研究会、太田宏明 2003「畿内型石室の変遷と伝播」『日本考古学』15 日本考古学協会
- 3) 鈴木一有 2008「原分古墳出土馬具の時期と系譜」『原分古墳調査報告編』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 4) 1. 大山田村教育委員会 1973『辻堂古墳発掘調査報告書』、2. 三重県 2005「下中島古墳群」『三重県史料編 考古1』、3. 三重県教育委員会 1987『向山2・6号墳発掘調査報告』、4. 5. 三重県埋蔵文化財センター 2007『研究紀要16-3：伊賀の考古資料1』
- 5) 竹内英昭 2007「伊賀の横穴式石室」『研究集會 近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局、宮原佑治 2020「伊勢湾

- 西岸域における横穴式石室の展開『横穴式石室の研究』同成社
- 6) 1, 2. 名張市遺跡調査会 1995『尻矢古墳群』、3, 4. 名張市遺跡調査会 1994『男山古墳群・上山古墳群』、5, 6. 嬉野町教育委員会 2002『上尾戸窯跡群 まんじゅう山古墳群』、7, 8. 三重県埋蔵文化財センター 1990『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告』第2分冊2
- 7) 註4と同じ
- 8) 竹内英昭 2008『伊勢湾地域の横穴式石室の構造と展開』『東海の古墳風景』季刊考古学・別冊16 雄山閣、石井智大 2010『第3節 小金3号墳の横穴式石室の位置づけ』『小金・高塚・斎宮池古墳群発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター
- 9) 大谷宏治 2018『東平1号墳副葬馬具と大刀の特徴からみた被葬者像』『伝法東平第1号墳』富士市教育委員会
- 10) 鹿島昌也・野垣好史編 2022『番神山横穴墓群・呉羽山古墳群発掘調査報告書』富山市教育委員会
- 11) 横須賀倫達・小林啓 2008『羽山1号横穴出土馬具の調査』『福島県立博物館紀要』22 福島県立博物館
- 12) 比佐陽一郎 2004『錫、鉛製耳環に関する基礎的検討』『古文化談叢』第50集（下）九州古文化研究会
- 13) ここでいう「生産単位」とは1つの須恵器窯において、1回の焼成によって生産された須恵器の単位のことであり、生産地域や窯を識別するものではない。
- 14) 1, 2. 久美浜町教育委員会 1983『湯舟坂2号墳』、3, 4. 京都府教育委員会 1987『埋蔵文化財発掘調査概報』、7. 註4-1と同じ、8. 註4-4と同じ、9. 註7-5と同じ、10. 一志町教育委員会 1971『上井生3号墳発掘調査報告』
- 15) 松永悦枝 2014『文堂古墳出土須恵器の年代と性格』『文堂古墳』大手前大学史学研究所・香美町教育委員会
- 16) 竹内英昭 2007『IV 伊賀市富岡 富岡前山古墳』『伊賀の考古資料1』三重県埋蔵文化財センター
- 17) 大谷宏治 2000『遠江・駿河における古墳時代後期の階層構造』『研究紀要』7 静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 18) 註12と同じ
- 19) 山田 猛 2000『1 遺物』『鳳凰寺遺跡第二次発掘調査報告書』大山田村教育委員会・大山田村遺跡調査会



写真5 出土遺物集合写真



調査前状況 (東から)



調査前石室露出状況 (南から)



古墳全景 (南から)



古墳全景 (空中撮影)



石谷遺跡東区全景 (西から)



SD 1 検出状況 (北から)



墳丘頂部土層 (北から)



墳丘北側土層 (西から)



墳丘西側土層 (南から)



天井石 (北から)



天井石 (東から)



羨道（北から）



玄室床面（北から）



玄室排水溝（北から）



玄門 (南から)



玄室南半 (南から)



石室全景 (南から)



玄室 (南から)



玄室天井石 (南から)



玄室奥壁 (南から)



玄室西壁 (東から)



玄室東壁 (西から)



玄室遺物出土状況 (南から)



B・C群遺物出土状況（南から）



E群遺物出土状況（西から）





出土土器 2



99

100





118



119



124



120



123



125



121



130



129



133



136



131



137



141



140

142

143



144

145

146



147

148

149



150



153



154



172



173



159



174



175



170



178



180



171



186



186 (穿孔)



184



188



189



190



191



192



193



出土金属製品 1



1



2



3

表



裏



4



表



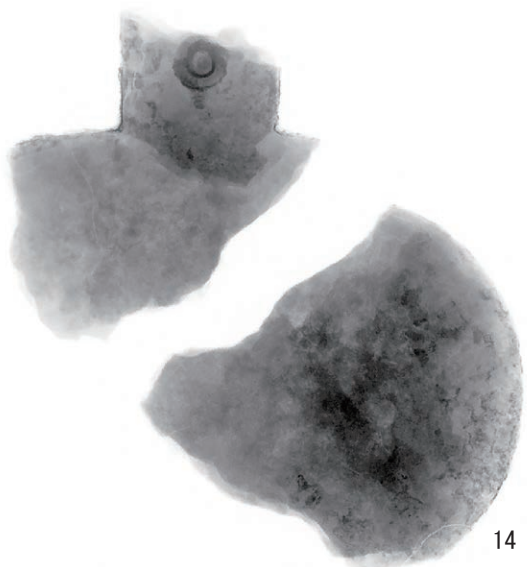
表



裏



裏



14



15

表



表



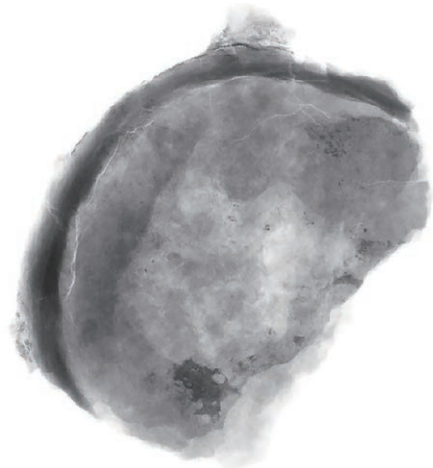
裏



裏



16



17

報告書抄録

ふりがな	いしだにいせき・いしだに1ごうふんはつくつちょうさほうこく							
書名	石谷遺跡・石谷1号墳発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	417							
編著者名	樋口太地							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 0596 (52) 1732							
発行年月日	2024(令和6)年 3月6日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いしだにいせき いしだに 石谷遺跡・石谷 ごうふん 1号墳	いがしなかわら 伊賀市中村	216e	385・89	34度 45分 27秒	136度 13分 55秒	20210527 ～ 20211008	394㎡	令和3年度 石谷の1通常 砂防事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
いしだにいせき いしだに 石谷遺跡・石谷 ごうふん 1号墳	古墳	古墳時代 近世～近代	横穴式石室	土師器、須恵器、 鉄器、耳環、土玉、 陶磁器、銃弾		鉄地錫張馬具が出土		
要約	<p>石谷古墳群は伊賀市東部の西教山から南北に延びる山塊の西側斜面に形成された小谷筋沿いに展開する古墳群の1つである。今回調査した石谷1号墳は当古墳群の北西端に位置し、服部川に流れ込む小溪流によって形成された谷地形の北側斜面に立地する。調査前の状況は墳丘の南半の大部分が破壊されており、半月状に残った墳丘と天井石と思われる石材の露出が確認できた。</p> <p>県営砂防事業（通常砂防事業 石谷の1）に伴う発掘調査の結果、明瞭な周溝は確認できなかったものの、地山の落ち込みなどから直径14m前後の円墳に復元できた。埋葬施設は羨道と玄室の南半は破壊されていたものの全長9m前後の横穴式石室と考えられる。石室内には敷石と排水溝が設けられ、敷石上や排水溝内から多くの遺物が出土した。</p> <p>敷石上からは須恵器・土師器などの土器類、鉄刀や馬具、耳環といった金属製品のほか、土製丸玉が出土した。排水溝内や埋土からも同様に須恵器・土師器・鉄器が出土した。土器類は6世紀末から7世紀前半の年代が与えられ、複数回に渡る埋葬行為が想定される。</p> <p>石谷遺跡からは近世から近代の遺物が表土より出土し、陶磁器の他に三八式実包などを確認した。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告 417

石谷遺跡・石谷1号墳発掘調査報告

2024（令和6）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 株式会社アイブレーション

